
こいねこ

北島夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こいねこ

【コード】

N3302Z

【作者名】

北島夏

【あらすじ】

幼いころに両親を失い、いつもふたりきりで過ごしてきたナオとみなも。

ある日突然、みなもの手が、猫の手に変わってしまいます。

あわてるナオとは反対に、みなもはというと、かわいいかわいいとのんきなもの。

ためいきをつくナオですが、そんなナオにも驚くことが起きます。

片思いの女の子にいきなり告白をされたのです。

クリスマスが近づく冬の日々を舞台にした、淡い恋物語です。

(1)

「かき揚げそばと季節のご飯セット」

「だめだよお。ナオちゃんはカレイの煮つけご飯だよお」

「魚嫌いなんだよ」

「でも順番だもん。順番守らないとわたしがカレイの煮つけご飯だよお」

「好き嫌いは良くない」

「ナオちゃんだって。えへへ、わたしは、かき揚げそばと季節のご飯セット」

「むー」

ここに来たときには毎回座るいつもの席。店員さんを呼んで、注文を済ませる。

しょうがない。嫌いだけど今日は魚だ。好き嫌いしていたら、このファミレスの全メニュー制覇なんてできないしな。

デザートに紅茶のシフォンケーキを追加してご機嫌のみなもから目を移して、窓の外を見る。

町はクリスマスカラー一色だ。緑と赤と白。通りの並木にはいろいろとどりの電飾がまたたき、商店街の店先やショーウィンドウにはクリスマスツリーが飾られ、サンタやトナカイ、ふわふわの白雪のイラストや小物がにぎわっている。店から出て、通りを駅のほうにずーっと見晴るかせば、もちろん、何百万ドルの、とはいかないけど、思わず見とれてしまうクリスマスイルミネーションが続いているはずだ。

「……クリスマスだなあ」

「クリスマスだねー」

いつの間にか、僕と同じく窓の外を眺めていたみなもが、セミロ
ングのふわふわくせつけをゆらして、僕の何気ないつぶやきに同意
する。

あいかわらずのこにこおっとり口調。子供のころからずっとみ
なもはこんな調子で僕のとりにいる。子供のころって言うか、生
まれたときから、だな。僕とみなもは同じ日に同じ病院で生まれた
そしてとなり同士のベビーベッドに寝かされたのだから。

ほんと、くされ縁。いつまで続くんだろうね、僕たちは。

窓からみなもに顔をもどし、そんなことをふと考える。

みなもも窓から目をもどし視線が合うけど、べつに、なあに？
とも訊いてこない。

とくになにか言いたくて見ていたわけじゃないことなんて、お互
い目を見れば一瞬でわかるから。

……なんだかもう熟年夫婦の域だけど、でもそれも当然かな。

お互いもう両親を亡くしてから何年も経つ。それからずっと、ふ
たりだけの家族のようにして育ってきたんだから。

「クリスマス、今年はナオちゃんち？」

「うん。去年はみなもんちだったからね」

家族のように、兄妹（僕のほうが十分くらい先に生まれた）の
ように育ってきたから、クリスマスも毎年一緒だ。となり同士の家
だから、どっちでパーティをやっても変わらないのだけど、いちお
う交代交代、お互いの家で開いている。ささやかな代わり映え、か
な。

「チャンスだよ！ クリスマスなんてこのうえなくいい機会なんだ
から、告白しなよ。いまのまんまじゃ話だってまともできないん
だよ？」

背中越し、となりのとなりくらいに離れた席から威勢のいい声が
聞こえてくる。女の子の声。きつと僕たちと同じくらいの年頃の。
話し相手の子の声は喧騒にまぎれて僕の耳までは届いてこない。

「わたしもがんばるから。ね、一緒にがんばろっ！」

そんな会話が続けている。

ファミレス店内を見まわすと、もうすぐクリスマスなのに関係あるのかないのか、いつもは家族連れが多いのに、今日は恋人同士っぽいカップルがけっこうちらほら。意識してみれば、そういうところはところずっとカップル率が高かった気もする。

クリスマスイヴって、そういうイベントの日なんだから。

僕にとってはいつもみなもととささやかなプレゼント交換をして、ちよつとおいしいものを食べる日なだけで、どきどきする出来事なんかとは無縁なだけだ。

「……クリスマスってさ」

「クリスマス？」

僕の間を見直して、小首を傾げるみなも。

と、そこで僕は、うーんと考え直す。

みなもととクリスマスカップルや恋愛の話？

照れくさくて、無理無理。

「んー、やっぱりいい」

「むう。あ、かき揚げそばと季節のご飯、来たー」

途中で話をやめた僕に一瞬不満そうな顔をするけど、すぐに運ばれてきた料理に気をとられるみなも。

「ナオちゃんにも分けてあげるからね」

「みなもにも煮つけ分けてあげるよ」

「それはいらないよお」

僕のカレイの煮つけも運ばれてきて、いつもと同じ、ふたりで味見をしいながらの食事が始まる。いつもどおり、これがおいしいあれがおいしい、これもうな、あ、だめだよお、なんて話しながら。

でもクリスマスかあ。

僕にだって気になっている子がいないわけではないけど、今年もいつもと同じ、みなもとふたりきりのクリスマスなんだろうな。

「あ。猫さんだよ、ナオちゃん」

やっぱり連日のファミレス通いってお金かかるよなあなんて思いながらの帰り道、街路灯に照らされた民家の塀のうえに白い猫を見つけた。

大通りからはずれた住宅街の道筋。静かな夜に白い毛並みは輝くようでもとても綺麗だった。

姿勢よく座って闇夜のどこかを見つめていた白い猫は、僕たちが立ち止まると、恐れて逃げることもなく、こちらを向いて、にゃあ、と鳴いた。

「かわいいよあ、ナオちゃん。こんばんはー、猫さん」

僕にはあつと笑顔を向けてから、みなもは猫に歩み寄る。

みなもがそつと手を近づけると、猫はぺろつと舌先でなめる。

「きょう。かわいいかわいいかわいいよあー！」

「猫だからねー」

「猫さんだからかあ。ふわあ、もうもうもつもつかわいいよあー！」

白猫は人慣れしているのか、目を細め、ごろごろと喉を鳴らして、みなもに撫でられるがままになっている。「にゃんにゃん。にゃにゃん？ にゃあーん」

「なんだって？」

「ご機嫌に猫語を操るみなもにのってあげる。」

「魚嫌いはだめだよ、つて」

「それはみなももだろ」

そんなことを話していると、白猫は、ふ、と誰かに呼ばれたように闇に沈んだ路地の先に顔を向ける。そしてあつという間に身をひるがえして、僕たちの前から去ってしまふ。

「行っちゃった」

「行っちゃったね」

僕は少しの間、猫の消えた闇を見つめていた。夜の白猫なんて、

なんだかちよつと幻想的な光景だったな、なんて思いながら。

みなもはというと、ぼーっとした表情でやっぱり猫の消えた闇を見ていた。みなもがぼーっとしているのはよくあることだけ。…

…と思っていたら、急に、

「猫さんはいいなあ」

とぼつりともらず。遠いどこかを見ているような、夢見ているような、そんな声。

なんだろう、とちよつといつもとちがうみなもを感じた気がしたけど、僕はコートの襟を正しながら、その言葉を聞いてまず思ったことを率直に言った。

「……いまの季節、寒いと思うけど？」

さっきの猫、首輪がついてなかったけど、寒い冬の夜はどうやって過ごしているんだろう。

「ううん。いつでもこうしてられるから、寒くないんだよ」

そう言って、みなもは僕のポケットのなかに冷たくなった手を入れてきて、僕の手を握る。

「わ。冷たっ」

「心があつたかい証拠なんだよあ」

にはあとなにがそんなにうれしいのか、しあわせそうにみなもは笑う。

「ずーっとこうしていたいなあ」

「なに言ってるんだか」

ずっとこうしてきたでしょーが。いつもふたりで。

結局、猫のことがうらやましいのと手をつなぐことになんの関係があるのかはさっぱりわからなかったけど、だんだんぬくぬくとしてきたみなもの手はあたたかくて、僕たちはそれからずっと手をつなぎながら、家まで帰った。

(2)へ続く

(2)

翌日、一二月一九日、驚くことが二つも起きた。

ひとつは朝。

登校準備を整え、いつもどおりに家の前で待っていると、普段よりも少し遅れて家を出てきたみなもが、開口一番、こう言った。

「ナオちゃん、ナオちゃん！ 手が猫になっちゃったの。にゃん」
そう言うみなもの左腕には、肘から指先まで、包帯がぐるぐると不恰好に巻いてある。

「さ。急がないと学校遅刻するよ」

みなもは学校に向かってさっさと歩き出そうとする僕の手を右手でひっぱって、もう一度言う。

「手が猫になっちゃったの。にゃん」

しつこいなあ。

しょうがないので僕は黙って、みなもの左腕の包帯を解く。
と。

にゃん。

「……え。なにこれ」

そこには、猫の手があった。

「猫の手だよ」

そう。

猫の手だ。

薄茶色のふわふわした毛並みに、やわらかそうな桃色の肉球のついたまるっこい指先。

まぎれもなく、猫の手。

僕はもう一度繰り返した。

「え。なにこれ」

「猫の手だよ」

みなもも繰り返す。

「らちがあかない。」

「いやだから、そうじゃなくて、どうしてこんなことに？」

おもちゃかなにかをはめてのいたずらではないのは、一目でわかった。だって肘から上のきめこまやかなみなもの肌との間に、継ぎ目がない。そもそもこれがおもちゃだったとするなら、それをはめたみなもの腕は、いまだんな風に変形しているのだろう。そんな変形、人としてありえない。だから、これは本物だ。

手にとって握ってみると……あ、ふわっとして、あつたかくて、気持ちいい。思わずふにふにと握ってしまう。

「あん、くすぐりたいよお」

くすぐすと笑うみなも。

自分の手が猫になっているというのに、焦りも緊張感も、まったくくない。

みなもらしいけど、「ここはびしっと言っ。

「みなも」

少し強めに名前を呼ぶ。

「なあに？ ナオちゃん」

僕がせっかく真面目な声を出しても、みなもはきよとんするだけだ。まあ、話を聞いてくれるならいいけど。

「みなも。どうしてこんなことになっているの？」

あらためて訊く。

みなもは、ん〜、と考える、

「猫さんになりたい、って思ったから？」

聞き返されても困るけど。そもそも。

「思ったからって、普通そんな簡単に猫にはなれないでしょ」

苦労すればなれるってものでもないだろうけど。

「うーん。そっかあ」

「いつ、こうなったの」

「朝起きたらね、猫さんになってたの」

「くいくい、と猫招きをしてみせて、楽しそうに言うみなも。

「なにか思い当たる節はないの？ そう、なっちゃったことに」

「んー、だから、猫さんはいいなー、なりたくないって」

「それ以外に。魔法とか、変な薬飲んだとか、なにかの呪いとか」

「なにかばかかしい単語並べてるんだ僕は。と思いつながらも、でも

これってあきらかに普通じゃない。本当に、みなもの手が猫の手に

なっているのだから。」

「だから、そのばかばかしい単語も、僕は真面目にくちにしたのだ

けど、

「呪いは怖いよお。お星さまにお願い、とかのほづがかわいいな」

とみなもは、ずれた反応を返してくる。

「みなもとの話が脱線しがちなことはいつものことなので、僕は気

にしない。」

「猫にいじわるしたりしなかった？」

「むう。するわけないよお！ 猫さん、大好きだもん」

「知ってるでしょお？ と僕にすねた目を向けるみなも。」

「うん、たしかに知ってる。僕とみなもは猫が大好きだ。飼ったこ

とはないけれども、昔から、道端で見かければ必ず足を止めて、話

しかけたりおやつをあげたりしてきた。」

「そうだよね。じゃあ、なんでだろう。……っていうか、さっきか

らなんでそんなにのん気なの！」

「自分の身体の一部が人外になってしまったというのに、みなもは

むしろご機嫌だ。さっきからにこにこしながら、自分の猫手を曲げ

たり伸ばしたり、てのひらを開いたり閉じたりして遊びながら話

している。そう言えば開口一番、にゃん、なんて言ってたっけ。」

「僕が、む、とにらんでもみなもは、

「だってかわいいよ？」

「くいくい、と招き招き。」

どんなときでものん気なのはみなもの長所でも短所でもあるんだよな。

僕は、はあ、とため息をひとつつくと言う。

「でも困るでしょ。それじゃあ」

「困るかな？ あ。鉄棒の授業のときは困るね。鉄棒、掴めないから、逆上がりのテストに落ちちゃっよ」

鉄棒。それはたしかに困るだろう。高校の授業に逆上がりのテストはないと思うけど。

でもそんなことじゃなくてさ。

「誰かに見られたら困るでしょ。すぐにつわさになって、保健所に連れて行かれちゃうよ。……もしかしたら政府に捕まって、解剖されちゃうかもしれぬ」

僕が脅かすように言うと、みなもはぶくつつとほおをふくります。「そんなにはかじゃないよ。だから包帯巻いてきたんだもん。ナオちゃん以外には見せないからあ、だーいじょーぶ」

そう言いながら、にゃんにゃん、と招き猫。

「左手は人招き」

「だからなんでそんなに緊張感がないのさ……」

言ってもしょうがないことは思いつつ、僕はまたため息。

「ん」。猫さんになるのもいいかなって

「いいわけないでしょ！」

「かわいいのに……」

しゅんとなるみなも。

まったくもつ。

まあ、たしかにかわいいけどさ。

と、そこでふと思った。

「ねえ。猫になったのは左手だけ？ 脚……は大丈夫そうだね。尻尾とか生えてない？」

脚は、いつもどおりのほそつこいのがスカートの裾からのぞいている。でも服のなかまではわからない。

「んー、大丈夫だよ。ほら、尻尾は生えてないよ」

そう言いながらみなもはスカートをめくってみせる。

うすピンク色の布地がちらつと見える。

「はしたないからやめなさい」

すぐにスカートを元にもどさせる。

まったく。僕が相手だと羞恥心働かないんだから。

今日何度目かのため息を僕がついていると、ふいにみなもが言う。

「ねーね、ナオちゃん。もうそろそろ学校行かないと、遅刻だよ？」

あ、忘れてた。

じゃなくて！

「そんなことよりも、その手のほうが問題だよ」

「包帯巻いておけば大丈夫だよお。ほら、ナオちゃんナオちゃん」

「あ、うん」

人通りはないとはいえ、いちおうここも往来だったのを思い出して、言われるままに包帯を巻くのを手伝う。

「さ。今日も元気に、がっこ、いこー！」

包帯を巻き終わると、たぶん怪我をしたって言い訳をするのだから、その左手を、おー、とふりあげて、スキップをするように歩き出すみなも。

「いや、だからさあ！」

人間の手が猫の手になっちゃってしまっただけだけ異常なことか、みなもは本当にわかってるんだろうか、とても怪しかった。

その日、たしかに包帯を巻いていればとりあえず問題はなかった。さいわい、僕とみなもは同じ二年A組。授業中のノート取りをしてあげることができたし、心配するクラスメートたちには話をあわせて説明することも出来た。

ちなみに包帯の訳は、家の階段から滑り落ちて筋を違えてしまったことにしておいた。骨折、なんて大げさな理由にしてみました。腕が元にもどったあとが面倒だったから。すぐにみなもの腕がもとにもどるなんて保証はもちろんなかったけど、当の本人であるみなものがのん気なものだから、あまり深刻になれなかったというのもある。よく考えてみれば、いや考えてみなくても、とんでもないことが起こっているのに……。

驚いたことのもうひとつは、放課後に起きた。

女の子に告白されたのだ。

しかもその相手は織部ちかさんだ。

僕やみなもと同じクラスの織部ちかさんは、僕がほのかに想いを寄せている相手、つまり片思いをしている女の子だったのだ。

背が低すぎるわけではないけど全体的に小づくりで小動物ちつくな織部さんには、活発なイメージはない。声の大きな元気な女の子が多いうちのクラスでは、おとなしくてあまりめだたないポジションにいると思う。でも暗いわけじゃなくて、いつもおだやかに笑っている子で、さりげない気配りが上手な子だ。週番が忘れがちな花瓶の水の入れ替えをしょっちゅう代わりにやっているのを僕は知っているし、化学の実験のときに他班がかたづけ忘れたビーカーを棚にもどしてあげたり……ってこれじゃまるで僕が織部さんの行動を逐一観察しているストーリーカーみたいだけど、ともかく、ふと見るととくに誰に告げることもなくさりげなく心遣いをしている少女なのだ。そんな織部さんを見ているうちに、いい子だなと思い始めて、いつのまにか僕のなかで気になる女の子になっていた。その織部さんに告白されたのだ。

好きです、って。

つきあってくださいませんか、って。

放課後の屋上で、肩のところまで切りそろえたまっすぐな黒髪をゆ

らし、真っ赤な顔をした織部さんに。

そのとき僕は、ぼかん、としてしまった。

放課後お時間ありませんか、と聞かれたときに、まさか、と思うどきどきはしていたのだけど、本当にその言葉を聞いたときには、なんだかぼーっとしてしまった。

その次に僕は混乱した。

僕はそのときまで、織部さんとはほとんどくちをきいたことがなかった。

だから、直接僕に向けられた織部さんの透明な声がすごくかわいくて感動してしまって。それから、どうして僕なんかを好きになつてくれたんだろうつてわからなくて。

そしてわからないながらも、好きな女の子からの好きですって告白に僕の頭には血が上ってしまって、顔がかつと熱くなる。

「あ、あの。急に変なことを言つてごめんなさいっ」

僕が言葉を返せずにいると、ますます赤くなりながら織部さんが頭を下げた。

「え、あ、ううん。こっちこそ、ごめん！」

「ごめん、という言葉に、織部さんが固くなるのがわかったので、あわてて言葉を続けた。

「あ、そうじゃなくて、えと、急だったからびっくりして、それで言葉が出て来なくて、そのことを、ごめん、って」

焦った僕は、しどろもどろになりながら言い訳をした。

「そ、そそそつでしたか。その、そうですね。急ですよ。えと、その……」

織部さんもしどろもどろになりながらそう答え、そこで、くちくちもってしまつ。

「……」

「……」

どうしていいかわからず、二人無言で立ち尽くしてしまつ。

って、ちがうちがう！ 織部さんは気持ちを伝えてくれたんだか

ら、今度は僕が返事をする番なんだ。内気そうな織部さんがこんな
にがんばってくれているのに、僕はなにをもたもたしているんだ。
返事を、返事をしなくちゃ！

「えと、その、ぼ、僕の気持ちは」
「そこまでくちにしたところで、織部さんが緊張に耐えられなくな
ったようだった。」

「あ、あのっ。そ、そのっ、きゅ、急でしたから、そのっ、返事は
いまじゃなくてもっ」

ちらちらと屋上の入り口を見ながらいまにも泣き出しそうな顔で
織部さんは言う。

「え、でも僕は織部さんのこと」

「ごめんなさいっ！」

がばつと頭を下げると、織部さんは入り口に向かって走り出して
しまった。

一瞬あっけにとられたけれども、織部さんが入り口に姿を消す前
に、急いで言う。

「織部さんっ、ありがとうっ！」

僕の声に織部さんはドアの前で立ち止まり、ぺこりともう一度頭
を下げた。

それからすぐに、逃げるように織部さんはドアのなかに入ってし
まったけれど、頭を上げたときの織部さんは、目は涙でにじんでい
たけど、くちもとにはちいさな笑みを浮かべてくれていた。

(3)へ続く

(3)

「ナオちゃん、またお魚料理だねー」

「そうだねー」

「わたしも魚料理だよー」

「そうだねー」

「ナオちゃんが魚料理二つ食べて、わたしは次の注文してもいい？」

「いいよー」

と流しかけ、

「って待ちなさい。そんなに食べられないって」

「むう。作戦失敗」

悪びれる様子のないみなもにため息をつく。

「まったく。ひとのしあわせにつけこんで」

「しあわせにはつけこんでもいい気がする」

「う……」

そうかもしれない。

いやいや、でも魚料理二つ、っていうか、そもそも二人前は無理。

このファミレス、ライスの量やたら多いんだから。

「よかったね」

「まあね。ほお、ゆるんでる？」

「ゆるみっぱなしだよお」

あれから、気がつくと織部さんのことを考えている。頭がふわふわして……正直言つて、夢心地だ。すぐに織部さんの別れ際のちいさなかわいい笑みが頭に思い浮かんで、ぽーっとしてしまつて、なんだかしあわせな気分で脳味噌がゆだっている。

織部さんに告白されたことは、すぐにみなもに話した。僕とみなもは、昔からお互いに起こったことはすべて話しあう。そりゃ、男の子のこととか、女の子のこととか、小学校の体育の時間に教室を分けられて説明されたような、微妙な話題はしないけれども。織部さんのこともそうだ。織部さんのさりげない心配りのことやちよつと気になっていることなどは以前に話したことがある。織部さんの心配りについては、みなもも気がついていていたそうだ。女の子からしてもちかちゃん是好かれる子なんだよ、とみなもも太鼓判を押していたので、告白された、と報告したら喜んでくれた。

「でもごめんな。はしゃいじゃって」

少し冷静になって、僕はみなもにあやまる。

「うん？」

みなもはわけがわからないようで小首をかしげる。

「だって、みなもの手が猫になってるほうが大問題なのにさ」

「そんなのいいよお。それに、考えたって、どうしたらいいかわからないもん」

みなもは気楽に笑っている。

もちろん、「そんなのいいよお」なわけはないんだけど、でもそうなんだよな。

猫になってしまった手を元にもどす方法なんて、さっぱりわからない。

それでも、放課後になるまでは 織部さんに告白されるまでは

さんざん頭を悩ましたのだ。

でもどうしたらいいか、なんて、対処療法さえも思いつかない。やっぱり誰かに相談したほうがいいのだろうか。友達……は、まず役に立たない。役に立たないって言い方は悪いけど、話したところで僕たちと同じくこうやって途方にくれるだけだ。警察や病院？ううん、公の力に頼るのは不安だ。みなもがどこかに連れて行かれてしまうかもしれない。どこかに隔離されて二度と会えなくなるかもしれない。そんなのはだめだ。後見人の佐藤さんと田中さん？

うっん、あのひとたちが真剣に僕たちの気持ちをくんでくれるわけがない。たぶん警察か保健所か病院か、とにかくそういうところに通報して終わりだ。

だめだ。

やっぱりなにも思いつかない。

僕が悩んでいると、ウエイトレスさんが注文をとりに来た。みんなもがメニューを読み上げている。

サバの味噌煮セット、ブリの照り焼きセット、カルボナーラ、かぼちゃプリン、モンブラン、ドリンクセット×2 うん、ちゃんとモンブランを頼んでくれている。さすが幼なじみ。僕の好きなものをよくわかってる。頭の片隅で、なんとなくメニューを反芻しながらぼんやりと思う。

って！

「なに魚料理ふたつも頼んでるの！ 食べられないって言っただよ！」

「大丈夫だよ。ひとつはふたりで食べよ？」

「食べよ？ じゃないよ。そんなに魚嫌いなの？」

「むっ。ナオちゃんだって嫌いなくせに」

「まだ間に合う。キャンセルしよ」

僕がウエイトレスさんと呼ぶために手を上げようとする時、

「ああん。ちがうのちがうの」

とあわてて僕の手を左手で掴む。

別に怪我をしているのではないわけだけど、包帯の巻かれた腕をばたばたしている姿がなんとも痛々しい気がしたので（というかはたからはそう見えるだろうから）、とりあえず僕は手を下げる。

「なにがちがうの」

僕は訊く。

「あのね。一品多く頼んでいくと、クリスマスイヴイヴまでに全品食べ終われるんだよ」

「え。ほんとに？ ……うっん、でもべつに無理してクリスマスま

でに終わらせることないでしょ」

「でもお、クリスマスイヴはちかちゃんと一緒でしょ？ だったらそれまでにきつちり終わらせないと」

「意味わかんないけど。だいたい織部さんとそんな約束してないよ」

「でもちかちゃんはきつとイヴの夜は会いたいつて思っているよ。女の子だもん」

「そういうものだろうか。でも。」

「いやでも、クリスマスパーティーは毎年みなもとやってるじゃないか。今年だって変わらないよ」

「僕は簡単に割り切るみなもに抵抗を感じて、言い返す。」

「うん。だから、わたしとのクリスマスパーティーはお昼にやるの。それで夜はちかちゃんに会いに行くの」

「でも」

「もお。ナオちゃん、これからはちゃんと女の子の気持ち考えるようにしないと、織部さんに嫌われちゃうぞっ」

自分だって、男の子とつきあったことなんかなくせに、えらそうにお姉さん口調で言うみなもに、なんだかちよつとむつとしたけど、でも、みなもの言うとおりなのかもしれない。みなもだっていちおう女の子なんだし、女の子の気持ちは僕よりもわかるだろう。

それに、クリスマスイヴを織部さんと過ごせるなんて、もちろん僕はすごくうれしい。織部さんとデートって考えただけで、緊張でどきどきしてきてしまつて逃げ出したい気持ちにもなるけど、すごく、とても、めっちゃくちゃ、めっちゃめっちゃ、うれしい。

でも。

「うーん」

「やっぱり、さっぱりしないものがある。」

それは、毎年毎年続けてきたみなもとのパーティーが、ないがしろになってしまうこと。中止になるわけじゃないけど、なんだかおまけというか、前座というか、そんな感じになってしまうこと。

それがどうにもひっかかる。

……しょうがないことなのかな？

このままうまくいって僕に織部さんという恋人ができて、そしてみなにもそのうち恋人ができたとしたら、僕とみなも、ふたりで過ごす時間はどんどん減っていつてしまふのだろう。いまは同じ学校に通っているけど、大学はどうだろう。進路がちがえば、会えるのは朝と夜だけになってしまふだろう。もし同じ大学に進んでも、そのあとには就職だって控える。どこまで一緒にいられるかなんてわからない。それはきつと、大人になるということだから、生きていくということだから、しかたのないことなんだろうけど……。

「ナオちゃん、難しい顔をしているよ？」

「え？ そう？」

沈んでいた考えから意識をもどすと、目の前には、すでにあいかわらずなんにも考えていなさそうなのんびりにここに笑顔にもどつたみなもがいる。

「そのうちシワが深くなって、はんにゃー、ってなっちゃうかも」

般若の、にゃー、のところ、みなもは猫の手を、くいつくいつ。

はあ……。

一気に脱力した。真剣に考えて損した気分になる。

やがて料理が運ばれてきた。

サバの味噌煮セット。

ブリの照り焼きセット。

カルボナーラ。

「あのさ」

「うん？」

「一品はふたりで食べるとか言ってたけど、みなもはそんなに食べられるの？」

みなもの前にはカルボナーラがある。食事としてはパスタはライトだけど、ここの料理はどれもけっこう量が多い。カルボナーラも、一・五人前とまでは言わずとも、かなりこんもりと盛りつけされて

いる。

「え？ うーんと……てへ？」

疑問系で言うんじゃない。

けっきょく僕が無理してサバとブリのほとんどを片付けなければならぬみたいだ。

「まったく……」

「てへへ」

もしかしたら、みなもは pasta さえも食べきれず、僕に押しつけるかもしれない。デザートはちゃんと食べるくせに。そういえば昔からいまにいたるまで、みなもとと食事をするといつもこんな感じだよなあ。

(4)へ続く

(4)

みなもとはじめてファミリーレストランに行ったときのことを、僕はまだはつきりと憶えている。

小学校に上がる前。僕の両親もみなもの両親もまだ健在だったころだ。

その日はクリスマスイヴで、僕たちのような家族連れで店内はあふれかえっていて、席に案内されるまでにけっこう待たされたのを憶えている。順番を待つあいだ、みなもとふたりでドアの窓にはりつき、ひらひらと舞い降りてくる雪が店内から漏れる光にきらきらと輝くのを飽きもせずと眺め続けていた記憶も、ぼんやりと脳裏に残っている。

やがて席に案内された僕たち二家族で、最初にメニューを決めたのは僕とみなもだ。窓の外を眺めるのと同じくらい飽きることなくシヨウウィンドウのメニューを眺めていた僕たちは、席につくなり、お子様ランチ！ と声を合わせた。

ちいさなハンバーグとスパゲティとオムライス、それからちよこんとクリームのかつたプリンとセットというごくありきたりのお子様セット。オムライスにはお約束の旗ものついている。なによりも惹かれたのはオマケでおもちゃがついてくること。高校生になった僕なんかから見たら、本当にたわいのないお菓子のオマケ程度のものなんだけど、そのころの僕やみなもにとっては、大好きなハンバーグやスパゲティやプリンが一度に食べられて、そのうえおもちゃまでもらえるなんて、夢のようだった。

おもちゃは子供のてのひらにおさまるくらいのおちいさな箱に入っていて、それがさらにファンシーなまるっこい星柄のプリントされ

た紙袋に入れられていた。シヨウウィンドウにも箱の中身は飾られていなかった。なにが入っているかはわからない。

優先的に作るようになってきているのだろうか、おこさまランチはすぐに運ばれてきた。もちろん、僕とみなもは早くそのおもちゃの中身を見たかったのだけど、ご飯を食べ終わってからねと親におあずけをくらっていた。だから、僕とみなもは、大好きなハンバーガーやスパゲティを夢中で食べた。

さきに食べ終わったのはいつものように僕だった。好き嫌いはないけれども元来のんびり屋であまり量も多く食べられないみなもは、どちらかの家に集まっただけの二家族での夕食のときでも、いつも最後まで食べている。そのときもそうだった。一所懸命、フォークやスプーンをくちに運んでいるのだけど、気ばかり焦ってしょっちゅうこぼすものだからなかなかお子様ランチプレートの上の料理が減らない。

ご飯を食べ終わったのだから、僕はもう、おもちゃの中身を見てもいいはずだった。でも、みなもの懸命な姿と、なにより親たちからの無言のプレッシャーを子供心に感じ、じっと我慢していた。

そのうちみなもがぼろぼろと泣き出した。ぐすぐすと鼻をすすりながらくちにする言葉はよく聴こえなかったけど、どうやら、ごめんね、ごめんね、とあやまっているようだった。

そのときやっと僕は気がついた。のんびり屋のみなもが、今日に限って焦っていたのは、僕を待たせないためだったのだと。そういえばそうだ。いつだったのん気でスローペースのみなもなんだから、ほんの少しの時間、おもちゃの箱が開けられないからって焦るはずもない。みなもが気にしていたのは、箱の中身じゃなくて僕のことだったのだ。

涙がぼたぼたテーブルに落ちるのを見て、僕は反省した。急かす言葉をくちにしたわけではなかったけど、そのときの僕はあきらかに箱を開けたくてうずうずしていた。つまり、みなも早く食べ終わ

れよお、とたぶん顔に出してしまっていた。みなもは、お子様ランチが届いたそのときから焦って食べていた。はじめから、僕を待たせてしまわないために急いでいたのだ。それがわかったから、僕は反省した。そして言った。

ゆっくりたべていいよ、みなも。それにおなかいっぱいになつたらいいよ。ぼくがたべてあげるから。このあいだみたいにおなかこわしたらたいへんだからな。

みなもは、みなもの小食を気にかける親を心配させないように、無理をして食べてお腹を壊したことがあったのだ。もちろん、そのころのみなもの両親がそんな心配をしていたことや、みなもが心配かけないように無理をしたことをちゃんと理解したのは、それからずいぶんとあとになってからのことだったけど。

僕がはげますように言うと、みなもは、うん、と顔をほころばせた。

いま泣いたカラスがもう笑った、と親たちが愉快そうに笑ったのを憶えている。

その雰囲気になんか安心したのか、やはりもうお腹いっぱいだったみなもはすぐに、もう食べられないの、と僕に助けを求め、私たち僕たちのやり取りをほほえましげに見ているだけだったので、僕がみなもの残した料理を食べた。

そうして、ようやくご飯を食べ終わった僕とみなもはにっこり笑いあい、さっそくオマケのおもちの开封にとりかかった。

「ごそごそと紙袋から箱を取り出して　そこで気がつけばよかったのに　开封して、僕は落胆した。」

箱のなかには綿がつめられていて、そのなかにビニールに入ったおもちの指輪が入っていたのだ。しかもピンク色の、大きなハート型のガラス玉のくつついた、どう見ても女の子用の。つまり、おもちや男の子用と女の子用があったのだけど、あやまって僕のみで女の子用が来てしまっていたのだ。そういえば箱にはかわいらしくくまやうさぎの顔の描かれたいかにも女の子用ですって柄だった

のに。男の子用の飛行機や電車の柄じゃなかったのに。期待していたぶん僕はがっかりして、目元に涙が浮かんでしまった。

たぶん、親が店員に事情を話してくれれば、男の子用をあらためて用意してくれたことだろう。

しかし僕の目から涙がこぼれ落ちる前に、す、と目の前にちいさなてのひらが差し出された。そこには、やはりハート型だけど、青いガラスの嵌ったおもちゃの指輪がのっていた。顔をあげると、そこにはみなもの真剣な顔があった。

みなもは言った。

ナオちゃん、あおはおとこのこのいろだよ。だからこうかんしよ？交換して青いものになったところで、ハート型の指輪はハート型の指輪だ。男の子の僕にとっては、正直何も変わらない。でも、青がみなもの大好きな色だということを、僕は知っていた。

ね、ナオちゃん。こうかんしよ？

いつになく真剣な表情のみなもに、僕は気圧された。涙も引っ込んだ。

みなもはきつと、僕のピンチを救おうとしているのだ、そう思った。実際は、店員に事情を話せばいいだけなのだからお門違いもいところなのだけど、でもみなもはそのとき真剣だった。

だから僕は指輪を交換した。

ピンクの指輪をみなもの手にはめてあげた。

青い指輪をみなもは僕の手にはめてくれた。

成り行きを見守っていた両親たちは、さっき僕がみなもをはげましたとき以上に、愉快そうにはしゃいだ。みなもの両親が言った。

ナオちゃん、みなものこと、よろしくね。

よろしくな、ナオくん。

う、うん。

よくわからなかったけど、僕はうなづいた。よろしくね。

ただ親の真似をしたただけだったのだろう、僕と同じく、やっぱりわけがわからなかっただろう。みなもまで同じことを言ったので、やっぱり僕は、

うん。

とうなづいた。

それから今度は僕の両親とみなものあいだで同じようなやりとりがあつて、僕とみなもはきよとんとしていたのだけど、もちろん、いまではそのときどうして両親が楽しそうにしていたのかの理由もわかる。

つまりはからずも、僕とみなもは指輪交換をしていたつてことだ。そりゃ、まるで家族のように仲が良かった両親たちに見れば、お互いの子供たちのそんな様子は、良い見ものだっただろう。

あのときの青い指輪は、一時期この町から引越していたときのどさくさでいまはどこにしまつてあるのかわからなくなっているのだけど、いつもはおつとりのみなもの一所懸命さや、両親たちの楽しげな笑顔が印象的だったその日のことは、いまだに驚くほど鮮明に憶えている。

ちなみにそれ以降、みなもが残す料理は僕が片付けるのが約束事になり、みなもの好きな色は青からピンクになった。

と、思い出に浸っているうちにも食は進み、僕はブリの照り焼きセットを食べ終わる。あいかわらず食事の遅いみなもはまだカルポナーラをくるくるとフォークに巻きつけている。

僕はサバの味噌煮をきつちり半分に切り分け、片方をみなもの側に寄せる。

「これ、なあに？」

みなもがきよとんと訊いてくる。

「いやいや、きよとんとするんじゃないってば。」

「半分ずつ食べるつて言つたじゃない」

僕が言つと、みなもはおそろおそろといった様子で答える。

「えと。わたし、もうお腹いっぱい……」

どうせそんなことだろうとは思っただけだね。

「猫なんだから魚好きでしょ」

僕は包帯を巻いたみなもの左手を見ながら言う。

「魚が嫌いな猫もいると思う」

「いや、いないと思うけど」

わからないけど、実際、そういう話は聞いたことがない。

「いじわるう」

上目遣いですねた顔をするみなも。

はあ。

「だから無理に注文しないほうがいいって言ったのに」

「むっ」

……ま、いいけどね。

） 5 ） へ 続く

(5)

翌朝、猫の手は二本になっていた。

「にゃん、にゃん」

みなもは、くすくす笑いながら家の門から後ろ手に出てきたと思つたら、さらに右腕まで猫になってしまった両腕で、招き猫のポーズをとってみせた。

僕はあわてるよりも前に脱力してしまった。

「にゃん、にゃん。じゃないでしょ」

「金招き」

右手だけをにゃん、と招き猫。

左腕も右腕もまだ包帯を巻かずにむき出しの猫手だ。たぶん両方とも猫の手じゃ巻けなかったのだろう。制服も、やっとのことで着た様子で、まるで追いはぎから逃げてきたような乱れ具合。胸のボタンは外れているし、シャツははみ出ているし、スカートはずれている。髪の毛もあちこち跳ねている。

「……やり直し」

「あう。でもね、ナオちゃん……」

「女の子失格」

「あう」

上から下まで全身をチェックした僕が言つと、情けない顔になるみなも。

「僕がやってあげるから」

「うん！ ありがとう」

嬉しそうにうなづくみなもを、いま出てきたばかりのみなもんちの玄関に押し込む。

勝手知ったるみなもの家。

歯ブラシからコップ、ブラシに到るまで、すべてピンクに統一された洗面所にみなもを連れて行き、洗面台備え付けのイスに座らせる。

「まず髪ね。高校生にもなって、これじゃ恥ずかしいでしょ」

「はい」

みなもは鏡に映った自分を覗き込み、脚をぱたぱたとさせている。まるで子供だ。

「ねーね、ナオちゃん。まだー？ まだー？」

櫛を手にした僕を鏡越しに見上げ、本当に子供のようにおねだりをしてくるみなも。僕はあなたのおかあさんですか。

「はいはい」

ため息をひとつついて、みなもの髪をくしけずる。

みなもの髪はくせつだけだ。天然のソバージュのように巻いていて、やわらかくて綺麗なんだけど、まとめにくい。それを、お湯に軽く浸して絞ったタオルで押さえながら整えていく。ふわりとシャンプーの香りが鼻をくすぐる。みなもの匂いだ。

「ふにゃあ」

みなもはしごく気持ち良さそうだ。猫だけにいまにも喉を鳴らしそうというか。

「寝ないでよ」

「はわ。なんでわかったの？」

わかるってば。目がとろんとしているもの。

登校前のこの時間、もちろんゆっくりしているわけにはいかない。髪をなんとかみっともなくない程度にまとめると、今度はみなもを立たせて、制服の乱れを整える。

まずは胸元のボタン。ジャケットの下のシャツのボタンが互い違いなものだから、ピンク色の下着が思いっきり見えている。

はあ。僕、年頃の男のはずなのになにやってんだろ。

自分の境遇に少し疑問を感じながら、僕はみなものシャツに手を

伸ばす。そうすると、当然といえば当然なんだけど、みなものほどよく膨らんだ胸元が目にはいる。でも幼なじみとはいえさすがにそんなところを見ているのは気まずいので、すぐに目をそらしてボタンに集中する　寸前、それが目にはいった。

「あれ？　それ」

「うん？　あ、これ？」

自分の胸元を覗き込んでみなもが答える。

「懐かしいでしょー。ずっと宝箱に入れておいたんだけど、首飾りにしてみたの。ナオちゃん……これ、憶えてる？」

みなもの胸元には、見覚えのあるピンクのハート型の指輪に細かいチェーンを通し、ネックレスにしたものがかかっていたのだった。

ちなみに、宝箱、というのは、みなもの大切なもの、主に僕が昔みなもの誕生日にあげたおもちゃのアクセサリーや手紙を入れたお菓子の宝箱のことだ。

「憶えてるよ」

昨日も思い出していたし。

僕の答えに、みなもは嬉しそうにほにゃっと相好をくずす。

「でもどうして急に？」

みなもも昨日、僕と同じように思い出していたのだろうか。

「うーん。にゃいしょ」

「にゃいしょ……内緒？」

「ん」

僕が少しにらんでみせると、みなもは、てへ、と舌を出し、

「ほんとーは、にゃんとにゃく」

「なんとなく？」

「うん。にゃんとにゃく」

猫語で話すのが楽しいらしく、くすくす笑う。

ほつといて、今度はシャツの裾をスカートの中に入れ、さらにスカートボタンを留める　って僕、ほんとになにしてるんだろ。

高校生の男の子なんです。まあ、みなもだからしょうがないけど。

で、最後に包帯だ。

左腕に巻き、右腕に巻き……しかし、これ、どういう言い訳にしよう。昨日の今日でさらにもう片方の腕まで怪我なんて、あきらかに不審だ。

「あやまって筋を違えた左手で手すりを掴もうとして失敗して、また階段から落ちて、今度は右手まで筋を違えたことにしようか？」

「むう。わたし、そんなにどじじゃないもん」

「そうかなあ。みなもならありえるって、クラスのみんなは納得すると思うけど」

「もお！ ナオちゃん！」

ふくれるみなもをスルーして、僕は言う。

「学校、休む？ みなもがあっけらかんとしているから僕までなんだか深刻になれないでいるけど、これってあきらかに異常事態なんだよ？ だから本当は家の中でおとなしくしているのが一番いいかもしれない」

みなもはすぐに言い返す。

「え〜！ やだよお。ナオちゃんと学校、最後まで行きたいもん！」

「最後までって、あと数日でしょ。お正月が明けたらまたすぐに三学期が始まるんだし」

大げさな。

「むう。行くのおー！」

「はいはい」

ま、ちよつと無理はあるけど、猫の手さえ見られなければなんとかなるかな。ノートは僕のをあとから写せばいいし。

しかし。

「それにしても、なにが原因なんだろうね、これ」

みなもの包帯の手を手にとりながら言う。

「本当に、思い当たること、ない？ よく思い出して」

「うーん……」

みなもは包帯のなかで、にゃん、にゃん、といった感じに猫の手

首を動かしながら、考え考え言う。

「うーんとね……一昨日、ファミリーストランの帰りに白い猫さんに会ったでしょ？ すっごく綺麗でかわいい猫さん。それで、わたしは、猫さんになりたいなって、なれたらいいなあ、って思ったの。それだけだよ？」

「それだ！」

「あう？」

「白い猫だよ！ きつとあの猫がなにか関係あるんだよ！」

妖怪？ 猫の幽霊？ そんなことはわかんないけど、きつとなにか関係ある。あの猫、やたらと綺麗だったもの！ 神秘的だったもの！ きつとなにかあるんだ！ やつと手がかりが掴めた！

「みなも！ 今日学校が終わったらあのときの猫、探すよ！」

「う、うん」

僕の勢いに圧され気味のみなもにかまわず、僕は決めてしまう。

「それからみなも！」

「わ。まだなにかあるの？」

「学校が始まるまで時間がない。全力で走るよ！」

「あう？」

包帯のなかの、みなものふさふさと柔らかい手を握って、僕たちはみなもの家を飛び出した。

(6)へ続く

(6)

放課後、僕とみなもはさっそく猫探しを行ったけど、一昨日の夜の白猫は見つけることができなかった。このあたり、野良猫、外猫はけっこう多いのだけど、真っ白い猫は珍しい。きつとよく目立つ。だから一昨日見かけたあたりを重点的に探せば案外容易に見つかるのではないかと考えていたのだけど、あまかった。

日が沈むまで僕とみなもは路地を探しまわり、そのあと夕食をとるためにいつものファミリーストランに入った。食事を終えたら、また探してみるつもりだ。夜にならないと出歩かない猫なのかもしれないから。

「あーん」

みなもがくちをあける。

「それ、こつちが言うセリフだから」

僕はくるつとフォークで巻いたたらこスパゲティをみなものくちに運ぶ。

みなもは両手が使えない。猫の手でなんとかフォーク程度なら握めるにしても、ファミレスのなかで包帯を解くわけにはいかない。だから今日は僕とみなもは対面ではなく隣に座り、僕がみなもに料理を食べさせている。つまりかなり人目が気になる、恥ずかしい事態に陥っている。

相手がみなもで、緊張することがないのだけが幸いかも。

これが織部さんだったら、緊張でぶるぶる手が震えてしまつかもしれない。

今日のメニューは、魚料理地獄からやっとなげ出して、パスタ三種。たらこスパゲティ、ミートスパゲティ、ペペロンチーノ。

昨日の失敗を踏まえて、今日はそれぞれ一品ずつにしようと思案したのだけど、いつもは無理なことを素で言い出すことはあっても、わがままは言わないみなもが、珍しくこのファミレス全メニュー食べつくしだけはクリスマスイヴ前までに終わらせることにこだわるので、しょうがなく折れた。今日はわたしも一・五人前食べるよ、なんてみなもは言っていたけど、けっきょく今日も僕が二人前食べることになるんだろうな、とあきらめはついている。あらかた食事が済んだところで、僕たちは話す。

「でもさ、このままどんどん猫になっていったらどうしよう」

「うーん。猫さん、かわいいよ？」

「かわいければそれでいいって？」

「うん　わたしが猫さんになったら、ナオちゃん、飼ってくれるよね？」

「やだよ、人間みたいに大きな猫なんて。猫っていうより虎だよ」

「むう。ナオちゃんが冷たい」
「すねてみせるみなも。」

「それより、前向きに考えなきゃ。白猫を探せば、きっとなんともなるよ」

僕は軽く流して話し続けるけど、

「……ナオちゃんが冷たい」

みなもは何故か本格的にすねているようだった。

「……わかったよ。飼うよ。本当に猫になったらね」

「ほんとっ!」

「そのかわり、猫になるときはちゃんと普通の猫サイズになつてよね」

「うん!　やったあ!」

とたん、上機嫌になつてはしゃぐみなも。自分が人間じゃなくて、猫になつてしまつてことのがそんなにうれしいんだか。

「ずっと飼ってくれる?　一生飼ってくれる?」

「はいはい。一生飼います」

「約束だよ？ 引っ越しのときに捨てていくとか、無しだよ？」

「捨てないよ。そんなことするわけないだろ」

「うん！ あーん」

元気よくうなづいたかと思うと、口をあけて、デザートチョコ
レートパフェを食べさせてくれるようにせがむみなも。

まったく。調子いいんだから。

しかしこれじゃ、猫の世話じゃなくて、鳥に餌をあげているみた
いだなあ。

一昨日と同じくらいの時間にファミレスを出て、同じ道筋を通り、
白猫と出あった路地周辺をしばらく探してみたけど、けっきょくそ
の日、あの白猫を見つけ出すことはできなかった。

(7)へ続く

(7)

翌朝、今度は耳が生えていた。

いわゆるネコミミ。

本物の猫耳。

みなものやわらかなくせっけの内側から、ひよこん、ひよこんとのぞいている。

「にゃーん」

今日も包帯が巻けなかったのだらう、昨日と同じくやはりむき出しのままの猫の両手で招き猫ポーズのみなも。

「にゃーん、じゃないって」

あいかわらず緊張感のないみなもを、すぐに家に連れ帰る。

これではさすがに学校に連れて行くわけにはいかない。

授業中帽子をかぶっているわけにはいかないし、左手、右手、さらに今日は頭にまで包帯を巻いているとなったら、さすがに担任教師もなにかあるのではないかと怪しむだらう。

「やっぱり、朝起きたら生えてたの？」

「うん。あのね、人間の耳より、よく音が聴こえるんだよ」

猫耳に触ろうと手をのばすと、くりんと動いて後ろを向く。

「あ。反射的に動いちゃった。どうぞ、ナオちゃん
今度は触らせてくれる。

ふよっ。

くてくて。

内側に触ろうとすると、くすぐったいのか、また耳がくりんと後ろを向く。

わかっていただけけど、やっぱり本物だ。

「かわいいでしょお？」

かわいい。ふわふわのみなもの髪に猫耳は似合いすぎる。
ってそうじゃない。

「かわいいでしょお、じゃないよ！ これはもう真剣にならなきゃだめだよ！」

これはもう、どころか、最初に左腕が猫の腕になったときから真剣にならなきゃいけなかったんだけど。みなものんびりとした空気に感染して、そのつもりはなくなるとどこか気楽にかまえちゃってたけど、三日続けて猫化が進んでいるのだ。これはもう、いくらみなも本人が焦っていないとはいえ、さすがに真剣にならざるをえなかった。

「ナオちゃん、朝から怒るのは身体に悪いよ」

「怒ってるんじゃないよ。真面目に話しているの。だって、このまま毎日毎日身体のごくが変化していったら、クリスマスあたりには本当に猫になっちゃうよ？ いいの？」

「んー、でも、ナオちゃん、そうになったら飼ってくれるんでしょ？」

昨日の会話のことだ。僕は、さすがにちよっと、かっとなった。

「もう！ みなもふざけすぎだよ！ 少しは真面目に考えてよ！」

「むっ。真面目だよお。わたし」

みなもは頬をふくらませるが、それ自体が真剣じゃないように見えて、僕は乱暴に言う。

「僕、学校行く。みなも今日は一步も家から出ちゃダメだからね！」

「えっ。わ、わたしもナオちゃんと一緒に学校に行きたい」

僕はみなもの言葉を最後まで聞かずに玄関のドアを閉めた。

みなもが最後に言った「一緒に学校に行きたい」って言葉に、なんだか妙にせっぱつまったものを感じた気がしたけど、どのみち連れて行くわけにはいかない。僕は一度かぶりをふってその声を脳裏から消し去り、学校へ向かった。

僕はその日、休み時間、昼休みと図書館にこもった。少しでもみなもの猫化現象を止めるための手がかりを探すためだった。みなもの状態を考えたら、本当はもう、僕だつてのん気に学校なんかに来ているところではないのだと思う。でも、僕の通う高校は歴史も古く、校舎とはべつに図書館があり、近くの大学から資料を探して教授が訪れるほど古くからの本がたくさん収蔵されているので、調べ物には最適だったのだ。

放課後も僕は図書館にこもって、手がかりになる本がないかと探した。民間伝承や、都市伝説、それからこの地方の郷土資料。かたつぱしから本を開いては閉じて探した。

でも猫に関する逸話はあれど、みなもの症状に該当するような伝承は見つからなかった。

人間が猫になつていく。

妖怪じみているのだから、ばかばかしいのだからわからない現象なんて、真面目な本には書かれていないのかもしれない。かといって、SFやファンタジーの小説本に似たようなネタを探したところで、解決の糸口になるとは思えない。……とは思いつつ背に腹は代えられないと小説の棚を探し始めたところで、下校時刻を報せる校内放送が流れた。

はあ。

僕はためいきをついて、立ち上がる。中腰状態になつて本を物色していたので、腰が痛い。

んーと伸びをし、またひとつ、手がかりを探せなかった落胆のため息を落とすと、僕は図書館を出た。

図書館から渡り廊下を通って校舎に入る。校舎内には人気がないもうすっかり日が沈んでいる。みなものは家で大人しくしているだろうか、きつく言い過ぎちゃったな、と少し後悔しながら、蛍光灯に照らされた無機質な廊下を昇降口へと歩いていく。

と、僕のクラスの下駄箱の前まで歩いてきたところで、思わぬひ

とと会った。

織部ちかさんだ。

「あ、あのっ、こ、こんばんはっ」

「こ、こここんばんはっ」

織部さんと僕はお互い一瞬のうちに真っ赤になり、どもりながら挨拶を交わす。

そして交わしたきり、ふたりとも次の言葉が出てこない。

心臓がいきなりどきどきしだす。

いまのいままでみなものことで意気消沈していたのに、なんてげんきなんだと思いつつも、頭のなかがこのあいだの告白のことでいっぱいになる。

この織部さんが、こんなかわいい織部さんが、僕のことを好きなんだ……。どっしよっ。

なにか話さなくちゃ。

せっかく好きって言うてくれたのに、なにも話さなかったら、嫌っていると思われてしまうかもしれない。ううん、緊張してしゃべれない男なんて、って嫌われてしまうかもしれない。

焦って焦って、焦りまくる。

「ど、どうしたの？ こんな遅くまで」

僕はやっこのことで訊く。

「え？ あ、あの、その、ちょっと、その……」

織部さんも焦っているのだろう、言葉が要領を得ない。織部さんは落ち着かな気に目を泳がせ、ちらつととなりの下駄箱の陰に目をやる。

その視線の動きに合わせて、さっと影が動いた気がする。

それでなんとなくわかった。

きつと友達になにか言われたのだろう。

はやく返事をききなよ、とか。

積極的にアプローチしなよ、とか。

それできつと、僕が帰るのを待っていたのだ。

これはきつと織部さんの積極的な意思じゃない。

織部さんはあのとき、返事はいまじゃなくていい、って言ったのだから、彼女なら僕から声をかけられるのを待っているはずだ。たしかに僕は昨日今日と織部さんを待たせてしまっているから、返事を催促されてもしかたないとも思うけど、でも織部さんは大事な決断を早くしろと急かすような、そういうタイプではないと思う。それに告白してくれたときだって、最後は逃げ出してしまったくらいに内気な子なのだ。いまじゃなくてもいいと言ったのに、自分から積極的に待ち伏せをするとは思えない。

きつとすごく緊張して待っていたんだろうな。

僕が図書館で調べ物をしている間、ここでずっと。

織部さんの友達だって（川添さんと、光井さんかな）、悪気があつてこんなことをしているのではないだろうけど、かわいそうじゃないか、つてちよつと思つう。

つて、すでに彼氏気取りな気持ちになるのはずうずうしいけど。

「あ、あの」

「あのさ」

織部さんと僕の言葉が重なる。

ふたりとも上ずつた声。

たぶん、ふたりは同じことを言おうとしている。

だから、思わず口をつぐんだ織部さんの代わりに、僕が言った。

「その。よ、よかつたら、一緒に帰らない？」

「は、はい！」

織部さんの顔に、ほつとした様子の笑みが広がる。

断られたらどうしようか、ここで待ちながらずっと緊張していたんだろうな。僕は申し訳ない反面、すごく嬉しくなる。

僕、やっぱり織部さんのことが好きだ。

(8) へ続く

(8)

校門を出たところで、僕たちについてきた影は反対方向に歩いていった。織部さんがちらつとふりむいたので、僕もふりむくと、やっぱり川添さんと光井さんで、織部さんに向かって、がんばれ、と親指を立てていた。僕も見ているのに気がつく、あわてて背中を向けてそそくさと歩いていったけど。

僕と織部さんは、なにを話していいかわからず、下駄箱を出てからずつと無言だった。

緊張で、身体がギクシャクしている。右手と右足が同時に出ているのに気がついて、さりげなく直したりする。織部さんは織部さんで、赤い顔のまま、ずつと下を向いて歩いている。

僕には実のところ話すことが、というか、話さなければいけないことがある。

もちろん、告白の返事だ。

返事は決まっている。

だからあとは口に出すだけなんだけど、なんだかどうにもタイミングがつかめない。

そんなに軽々しく答えてしまっているものなのかどうかとか、もっとよく考えなくてはいけないんじゃないかとか、あとみなもとの関係はどうなるのかなってこともちらつとだけどうしても頭の隅にある。

あ、でもそういえば、この場にふさわしい話題がひとつある。

「あ、あの。織部さんの家は、どこらへんなの？」

一緒に帰るといったって、みなもが相手のときとは違って、限度がある。登下校の際に校門からこちら側の道を織部さんが歩いてい

るのを見たことがあるから、いまのところは一緒なのだと思うけど。
「あ。えと。わたしの家は……想いの丘ニュータウンってわかりますか？」

「うん。あのちいさな丘　想いの丘の、ここからだ反対側になるあたりだよな？」

「はい。その想いの丘ニュータウンの南地区に総合病院があるんですけど、その近くです」

僕とみなもの家とは想いの丘を挟んでちょうど反対側ってところかな。想いの丘をつきればそんなに遠くないけど、丘を登ることを考えれば回り道をしたほうが楽、って感じだろうか。

「そっか。僕の家はちょうど丘を挟んで反対側あたりかな」

「はい、知ってます　あっ」

ぼろっともらしてしまい、あわててくちを押さえる織部さん。

「あ、あの、わたしは、べつに　」

僕の家を知っていることに後ろめたさを感じているのだろう。織部さんはさらに真っ赤な顔をして、わたわたと言いつきをくちにしようとする。

でも僕にはすぐに想像がついた。

「川添さんたちが調べたとか？」

「あ、はい。い、いえ、その……」

また思わず答えてしまい、すぐに否定しようとするけど、もう遅い。遅いことを悟り、織部さんはもうなにも言えなくなってしまう。困って、後悔して、いまにも逃げ出したそうなのにながらばって踏みとどまっている姿の織部さんは、やっぱり小動物チックだ。好きな子にいじわるをしたくなる心理ってこういうのかな。困っている姿もまたかわいいって思ってしまった。でもすぐにかわいそうになって、僕は言う。

「いい友達だね」

織部さんははっと顔をあげて、僕を見る。

校門を出てからまっすぐに僕の顔を見てくれたのはこれがはじめ

てだ。

織部さんは、嬉しそうに笑って、

「はい！」

と答える。

それからやっと少し緊張が解けたのか、たどたどしくだけど、話してくれる。

僕の家は住所を知っているだけで行ったことはないこと。住所は職員室の担任の先生の名簿からこっそりと川添さんと光井さんが調べてくれたこと。彼女たちは織部さんのために本当に真剣で、今日のこと、臆病で逃げ出したがる自分を引き止めて鼓舞してくれたこと。そしてそのことに織部さんは心の底から感謝していること。

たどたどしくも一所懸命友達のことを話す織部さんからは、その友達想いのやさしい心があたたかく伝わってきた。僕までなんだかやさしい気分になってくる。

「あ、あの。すみません。わたし、自分ばかり話してしまっってはっと気がついて、織部さんは頬を染めて頭を下げる。

「え。いいよ、いいよ。ずっと聞いていたくらいだよ」

僕が本心からそう思っというと、

「そ、そんな。わたし、話し下手だし。すぐ緊張してしまうし」

「そんなことないよ。川添さんたちのこと大事にしているんだなって、織部さんのやさしい気持ち、伝わってきたもの」

「や、やさしいだなんて、そんな。わたしは普通で……なにやってもだめな子で……か、からかわないでください……」

恥ずかしいらしく、きゅゅつと小さくなってしまふ織部さん。

僕はすぐに言う。

「からかってなんていないよ。僕、織部さんがやさしいって知っているもの」

「え？」

急に顔が熱くなる。心臓がどくどくと脈を打つ。

よし。言っぞ。

言わなきゃ。ここで言わなきゃ！

深く息を吸って、僕は言う。

「ずっと、見てたから……」

「そ、それって、その」

もう一度息を吸って、続きを言おうとしたそのときだった。

すでにとっぷりと暮れていた闇夜に、さっと白い影が走った。

「あっ」

二人の目がそちらに向く。

白い影は光のように夜道を走り、塀の上にさっと乗る。

いた！

あの白猫だ！

僕の身体は反射的に動いていた。

「夏目くん？」

急に身を翻した僕に驚いて、織部さんが僕の名を呼ぶ。

「あの猫、探していたんだ」

ぱっと走り寄ろうとした僕だけど、あわてて近づいて白猫を驚かせてはいけない。

織部さんにそう言うと、僕は白猫が警戒しないように、ゆっくりと、肩の力を抜き、自然な動きを心がけて、近づいた。

白猫はそんな僕を一瞬見たけれど、害がないと判断したのか、そのままぺろぺろと身体を舐め始める。

「ひさしぶりだなー。僕のこと、憶えてるかー？」

そんなことを言いながら僕は白猫の側まで近づいた。

この白猫は、まちがいはなくあの晩の白猫だ。全身純白で、暗い路地のなかで街路灯の光を受けると、輝いているように見えて、神秘的にさえ見える。

この猫がみなもの猫化に関係しているのだろうか。

僕はじっと猫を見つめる。

白猫も、側に来たままじっとしている僕をもう一度見上げ、僕の目を見つめる。

が、すぐにまた身体を舐める。

白猫は僕をまったく警戒していないようだった。

手をのばして背中を撫でてみた。しかしこの前の夜と同じく、やっぱり噛みついたり引っかかりたりしないし、逃げ出したりもしない。飼い猫ではないと思うのだけど、ずいぶんと人間慣れしている。

……たしかにもものすごく綺麗な猫だけど、普通の猫のように思える。

「あの、夏目くん」

織部さんに呼ばれ、ふりむく。

織部さんは、カバンから彼女らしいちいさな弁当箱を取り出していた。フタを開けた弁当箱には、ウィンナーが二本、残っていた。

「食べるかな？」

織部さんは遠慮がちに訊いてくる。

僕が猫を手なずけようとしているのを見て、気をきかせてくれたのだろう。

「うん。ありがとう」

と僕がお礼を言っているあいだにも、猫は目ざとくウィンナーに気がつき、すたつと路地に飛び降りると、とことこと織部さんに向かって歩いていく。

「はい。どうぞ」

スカートをたくし込んで織部さんはしゃがみ、ちよこんと行儀よく座り込んだ白猫の前に弁当箱を置く。白猫は、にやあ、と織部さんの顔を見上げて一声鳴くと、弁当箱のウィンナーを食べ始めた。白猫は前足でウィンナーを押さえて、器用に食べている。

僕もしゃがみ込み、織部さんとともに、白猫の食事を見守る。

「かわいいですね」

「うん」

人慣れしていてうーうーと唸ることもなく、夢中になってウィンナーにかじりつく姿は、とてもかわいかった。

「でも、普通の猫みたいだ」

とても綺麗な猫というだけで、どう見ても普通の猫だ。

「普通の、って?」

「あ、いや、えと……」

みなもの猫化のことを話して、信じてもらえるだろうか。

うん。織部さんなら信じてくれる気がする。力になるうともしてくれるだろう。

でも、安易に僕たちの問題に巻き込んでしまっただけはいけない気がする。

僕が逡巡しているあいだに白猫はウィンナーを食べ終え、食事を与えてくれた織部さんの脚に身体をすりつけ、ごろごろと喉を鳴らし出す。

織部さんは、くすくすと笑いながら、白猫の喉をころころと撫でている。背中を撫で、尻尾の付け根あたりをかりかりとかいてあげると、猫は尻尾を立ててふるふるとふるわせる。気持ちいいのだ。

やっぱりどう見ても普通の猫だ。

ふう、と密かにため息をつき、織部さんに話しかける。

「織部さん、猫に慣れてるんだね」

猫と戯れる織部さんには、恐る恐る、といった様子がない。この子はどこまで許してくれるのかな、という気づきが見えるだけだ。「うん。このあたりってにゃーにゃ、多いから、よくお弁当のおかずをあげたりしてるんです」

「……にゃーにゃ?」

「あ。ち、ちがくて、その、猫……」

織部さんの顔がぼっと赤くなる。
なるほど。

「にゃーにゃ、って呼んでるんだ? かわいいね」

「えっ?」

織部さんの頬がさらに赤くなったので、そこでやっと僕は、かわいい、が二重の意味を持ってしまっていることに気がついた。

今度は僕があわてる番だった。

「あ、ちがくて、その？にやーにや？って呼び方が、かわいいって……」
とそこまで言って、その言い方だともうひとつの意味を否定してしまふことに気がついて、

「あ、いや、？にやーにや？って呼ぶ織部さんも、その、もちろんかわいくて」

ってなにを言ってるんだ僕はーっ！

「え、あ、その、わたし……」

一瞬かんちがいた自分と、でもやっぱりかわいいと僕に言われたことに、織部さんは言葉が出てこないようだった。

僕は僕で恥ずかしいことを言ってしまった、頭に血が上って言葉が出ない。

そのあとはふたりして、もじもじとだんまり。

やがて、

「あ」

二人の声が重なる。

お礼の挨拶なのか、白猫は、にやっ、と一声鳴き、塀の上に飛び乗ってとことこと歩いていってしまった。

「行っちゃいました」

「行っちゃったね」

暗闇に消えていく白猫を、しばらくふたりして目で追い、それから僕は、あたふたどきどきと微妙な空間を作ってしまった。僕と織部さんと、そんなことにはおかまいなしに、ご飯をもらい終わると、さっさとこの場を去ってしまった白猫のげんきんさの対比がなんだか笑えてきてしまって、吹きだしてしまった。

すると、やはり同じように感じていたのか、織部さんもくすくすと笑いだす。

「猫ってげんきんだよね」

「そこがかわいいところでもあるんですけど」

そうだね、と顔を合わせて笑う。

弁当箱をかたずけて、またね、と白猫の消えた暗闇に向かって手をふる織部さんとともに、また歩き出す。

僕は、そういえば、と思いついて訊いてみる。

「織部さん、猫にまつわる話って聞いたことないかな？」

「猫の話、ですか？」

突然の問いに、きよんとする織部さん。

「うん。人が猫になるとか、猫が人になるとか、そんなような話。昔話のようなものでもいいんだけど、できればこのあたりに伝わる話でそういうのってないかな？」

唐突だよな、と思っただけど、織部さんは不審がらずに小首をかしげながら考えてくれる。

「猫の話ですか。わたしが知っているのは、よく聞く昔話ぐらいです。百年生きた猫はネコマタっていう妖怪になるとか、ネズミに騙された猫が十二支に入れなかったお話とか」

僕もその二つの話は知ってる。ネコマタについては、みなもの症状に少し似ているかもしれないと思って、僕も考えたのだ。しかし、猫がネコマタになるとはちがって、みなもは人間なのに猫になりかけているのだ。状況が違う。

僕の顔に、残念そうな気持ちにじみ出てしまったのだろうか、織部さんが、

「すいません。お役に立てなくて」

と頭を下げる。

「ううん。いいのいいの。たいしたことじゃないから」

僕は努めて明るい顔を作って、首をふってみせる。

そんな僕に、織部さんはもう一度、ごめんなさい、とあやまったけど、ふいに、そういえば、と顔をあげる。

「猫の話ではないんですけど、このあたりに伝わる話ならひとつ知っています」

「このあたりの？」

猫が出てこないのなら、直接的には関係ないのかもしれないけど、情報はなるべく多く集めておきたい。

「はい。わたしは、高校に入る前にこの町に引っ越してきたので、昔からここに住んでいるみさきちゃ……川添さんに以前聞いた話なんですけど」

「聞かせてくれる？」

「はい」

川添さんから織部さんが聞いた話というのは、こういうものだった。

この町には？想いの丘？と呼ばれるちいさな丘がある。町の北側から中心ちかくまでぽつこりと盛り上がっている丘だ。織部さんが住んでいるニュータウンの名前にもなっている、この町のシンボルのような丘だ。その？想いの丘？が、何故、「想いの」という名前がつけられているかという話だった。

話自体は複雑というか単純というか。

遠い昔、このあたりに住んでいた豪族の姫が恋にやぶれて自ら命を散らしたからとか、明治時代に自由にならぬ我が身を嘆いた女学生が集団自決をしたからとか、その昔UFOが落ちたのだから、そこからへん、川添さんがいいかげんに話したらしいので、真面目に受け取るとばかばかしくてやってられないのだけど、とにかく？想いの丘？にはなにかそういういわくがあり、その因縁だか影響だかで、想いさえ深ければどんな願い事でもかなえられる、といううわさが昔からあるという、そういう話だった。

織部さんは、話しているうちに、あまりにも突拍子もないことを話していることに恥ずかしくなったのか、途中から申し訳なさそうな、消入りそうな、いますぐにでも止めたそうな声と表情で話していたけど、でも、その話を聞いているうちに、僕にはあながち的外れでもないように思えてきていた。

だってみなもは言っていたのだ。

猫になりたいと思った、って。

豪族の姫とかUFOとかはともかく、その点は無視できない。

僕が思いのほか真剣に聞いているので、織部さんもほっとしたのだろうか、さらに話を続けてくれる。

「その？想いの丘？を奉っているらしい神社が、丘の森のなかにあるそうです。お祭りも開かないから寂れていて、まるでもう誰も管理していないような神社、って川添さんは言っていましたけど……」

「神社か……」

行ってみる価値はありそうだ。白猫がただの猫だった以上、なにしろ、手がかりがまったくない。豪族の姫に女学生にUFOとなんだかうさんくささ満載だけど、行ってみない手はない。

考えながら歩いているうちに、僕と織部さんの分かれ道に差しかった。

「参考になったよ、織部さん。ありがとう！」

分かれ道で立ち止まり、僕はお礼を言う。眉唾っぽいとはいえ、みなもの状態ともっとも合致している情報をもらえたのだ。だから僕は心からお礼を言った。

「い、いえ。少しでもお役に立ったのなら幸いです。……それから、今日は一緒に帰ってくれて、嬉しかったです。ありがとうございまして」

織部さんはカバンを持った両手を身体の前でそろえて、ぺこりと頭を下げる。

僕はあわてる。織部さんと帰れて嬉しかったのは、こっちこそなのだ。

けっきょく告白の返事はしそびれてしまったけど（僕の落ち度だ！）、すごく、嬉しかった。

「ううん！こちらこそありがとう！……あれ？」

そのとき一瞬、既視感を得た。

あれ？

以前にもこんな場面があったような。

「……どうかしましたか？」

あれ？ と首をかしげたまま動きを止めた僕に、不思議そうな顔を向ける織部さん。

「え。あ、その、昔、やっぱり織部さんとこんなことがあったような……」

「えっ!？」

織部さんが驚いた顔になる。

「あ、ごめん。たぶん、デジャヴユってやつだと思う。ごめんね、変なこと言っつて」

「あ、いえ。その……」

ちょうどそのとき、路地に大型のトラックが入ってきた。僕と織部さんが分かれ道に立っつていては、トラックは通れない。

「織部さん、それじゃ、また」

「あ。はい、失礼します」

織部さんはもういちど頭を下げると、トラックに道を空けようと急いで路地を曲がっつていく。ととととと走るその姿もまた、小動物ちつくでかわいい。

僕も急いで道を空けながら、考える。

織部さん、そういえば別れ際になにか言おうとしていたみたいだけど、なんだっつたのかな。

そう思いつつ、焦りは感じなかつた。

今日は織部さんとたくさん話すことができた。少しは打ち解けたらと思う。次に織部さんと話すときには、きつともつと打ち解けて話すことが出来るだろうと思う。というか、そう努力したい。だから、そのうちまた話す機会もあるかなと思つたからだつた。

(9)へ続く

(9)

ちか 織部ちかは、夜道を家に向かって歩きながら、嬉しくてくちもとがほほえむのを止められなかった。

夏目くん…… ナオくん、わたしのことを少しだけ憶えているみたい。わたしのこと、全然わからなくなっただけでおかしくないのに。

それなのにナオくんは、記憶のどこかに留めてくれている。まさか憶えてくれているとは思っていなかった。ちかは、ふわふわと夢心地だった。

嬉しいな。

嬉しいな。

足取りが弾む。

あ。でも……。

びたりと足が止まる。

もしかして思い出してもらえたとして、それはいいことなのかな？

一瞬のうちに、夢心地が不安に変わる。

だってあのころのわたしといったら……。

心が沈みかける。

でも。

「ううん」

すぐにちかの心と表情はおだやかなものになる。

あのころのことは、いい思い出。

そこにはナオくんがいるんだから。

ナオくんがいい思い出にしてくれたんだから。

ちかがナオと出会ったのは、実は高校に入ってからではなく、小学校三年生の冬のことだった。

十二月の半ば。街中はクリスマスイルミネーションでいっぱい、クリスマス商戦も本番を迎えつつある、そんな時節だった。

そのころちかは病院に入院していた。

この想いの丘ニュータウンの病院ではない。もつと遠くの、海辺の町の病院だ。生まれてから中学三年生までちかたち一家が住んでいた町の病院だ。

ちかが入院したのは交通事故にあつて怪我をしたからだ。居眠り運転でハンドル操作をあやまった車が歩道に突っ込んできたところにちかがいて、跳ねられた。ガードレールがクッションがわりになって衝撃がやわらげられ、さいわい身体は数箇所打撲と擦過傷で済んだのだが、跳ね飛ばされたときに路面で頭を打つてしまい、出血も多かった。すぐに救急車で病院に運ばれ傷口の縫合が行われ、命に別状はなかったが、後遺症を懸念しての検査のために、ちかは数週間の入院をすることになった。

入院して一週間。検査で異常は発見されず、傷口も順調に回復していったが、ちかはもう学校に行きたくないと言った。沈んだ気持ちでいた。誰にも会いたくなかった。クラスの代表で見舞いに来たクラス委員たちにも、仲のいい友達にも会っていない。

それは、頭の傷口を縫合するために、髪を剃ってしまったからだった。

治っても髪が生えるまで学校に行きたくない、と親に言うと、命が助かっただけでもよかったのよ、とやさしく諭す。

でも坊主頭のまま学校に行けば、クラスのいじわるな子たちを中心に、かっこうの笑い者になることがちかにはわかっていて。

もともとそういつたいいじわるな子たちに、チビ、どんくさい、本ばっかり読んでいて暗い、と蔑まれることがよくあるちかだった。だから、そのうえ坊主頭のまま学校に行ったりしたら、たぶん、こっぴどくいじめられるようになる。ちかには、その光景が手に取

るように予想できた。

ただでさえ坊主頭なんて年頃の女の子にはつらいのに、学校に行けば最悪の未来が待っている。父親も母親もやさしいけど、きつといいめられるから学校に行けない、なんて、病院に駆けつけてきてちかが無事だとわかったときに人目もはばからず大泣きした両親には、なんだかささいなことでもわがままを言うようで、申し訳なくつて口に来ない。

だからちかは、ひとり不安を抱え込んだままふさぎこんでいるしかなかった。

そんなちかの入院中の唯一の楽しみは、よく日の当たる休憩室での読書だった。休憩室は中庭に面した東側の壁が一面ガラス張りで、そのガラス張りの壁の横にちよこんと置かれたソファがある。物語の世界に没頭しつづけて、ふと目を上げたときに、そこに明るい中庭を見てほっと一息できるその場所が、ちかのお気に入りだった。

休憩室は病棟に入院している患者たち専用の場所だったから、知り合いに会うことはまずなく、ちかは安心して、何時間もそこにいらることができた。みな患者だから、ここでは、お互い、誰かが誰かを笑うこともありえない。

ちかは、遠からず直面するであろうつらい現実を心の底に押しやるように次々と頁をめくり、物語の世界に没頭していた。

しかしそんな場所でも、傍若無人にふるまう人間はいる。

ちかと同じ年か、それともひとつくらい上だろうか、足を骨折して松葉杖を付いた少年がいた。わがままいじわるを絵に描いたような身体の大きな少年で、その少年が入ってくると、誰もが一瞬のうちに緊張した。静かに交わされていた談笑が止み、おだやかだった休憩室の空気が張りつめて、静まりかえる。少年は入り口に立つとじろじろと休憩室内を見まわし、気の弱そうな老人や婦人に狙いを定めるや、隣に座って、病状に関する心無い質問を繰り返す。ジイさんバアさんと不遜な口の利き方をし、へえ、それじゃもうそろそろヤバイね、なんて言葉を平気で口にする。老人たちが集まって観

ていたテレビのチャンネルをなんの断わりもなく変えるし、誰かが注意をすれば、うるせえこのくたばりそこない！ などと罵倒し、機嫌が悪くなればくずかごを松葉杖で蹴飛ばしたり自動販売機を殴ったりする。

若い大人の男性がいれば少しはおとなしくしていたのだろうけど、ちかが入院していたころは病弱そうな老人と女性ばかりだったから、誰も少年に逆らうことが出来なかった。

ちかはというと、同じ年頃ということで、目をつけられているのがうすうすわかっていたから、その少年が休憩室に現れたときは、何気なさをよそおいつつも急いで自分の病室に戻るようにはしていた。目を合わさないようにして少年の横を通って休憩室の外に出るとき、あからさまな舌打ちが聞こえることもあった。これは、隙を見せたらからまれる。だからちかはいつも用心をしていた。

しかし、ある日、とうとう少年に捕まった。小説に夢中になりすぎて、その少年が休憩室に入ってきたのに気がつけなかったのだ。

開いている本に、いきなり影がかかったので、顔をあげると、少年がいた。

ちかは顔をあげたまま動けなくなった。

そんなちかに、少年は残忍な笑みを浮かべた。

「よお、ハゲ女。お前、女だよな」

同年代だからだろう。いままで以上に遠慮のない、侮蔑的な言葉をいきなり少年は吐いた。

ちかはなにも答えられなかった。

なんの罪もないのに理不尽にぶつけられる悪意に、ちかの心はすくみあがった。

まわりに助けを求めることも出来ない。

もし周りを見まわすことが出来ても、誰もこちらに目をむけてくれないだろうことは、経験からわかっていた。

自分もいままでそうだったから。怖くて、自分に害が及ばないよ

うにと祈るのが精一杯だったから。

「おい。なんか言えよハゲ」

無視されたと思ったのか、少年の声にいらだちがまじる。

はい、と返事をしようと思ったが、恐怖に身体が固まって、口が動かなかった。

それに、もちろん、ハゲ、と侮蔑されたこともちかの心を傷つけていた。それこそが、いまのちかの心を傷つける一番残酷な言葉だったから。その言葉を投げつけられるのが怖くて、心が引き裂かれるのが怖くて、学校に行く日を恐れていたのだから。

少年もまた、その言葉が一番ちかを傷つけることに気づいているようだった。

「よおハゲ。なあハゲ。なんでお前女のくせにハゲなの？ どうかで転んで頭でもぶつけたのか？ なあハゲ？ だっせえなお前。ブスでチビでハゲなんて最悪だな、ハゲ」

ちかは何も言えない。ただただ、傷つき血を流す心を抑えて、少年という悪意の台風が過ぎ去るのを待つしかなかった。

「なあハゲ、お前いつもここで本読んで、おもしれえのかよ。性格まで暗いなんてほんとゲロ最悪だなハゲ」

目に涙がたまってきた。自分のことが、本当にみじめに思えてくる。

性格が暗くて、チビで、ブスで、ハゲで……。

「おい！ いい加減何とかいったらどうだよ、このハゲブス！」

もうだめ……。

ちかが泣き崩れるその寸前だった。

「何言ってるの。かわいいよ」

突然、まだ声変わりのしていない高めの少年の声が休憩室に響いた。

そしてその声の主、ちかや松葉杖の少年と同じ歳ぐらいの細身の少年が歩いてくる。

「なんだお前」

「夏目直」

そう名乗った少年 なつめなお 夏目直 ナオは、ちかをかばうように、

松葉杖の少年とのあいだに割り込んだ。

松葉杖の少年は、思わず後ろに下がる。

まっすぐに目を見つめてくるナオに、松葉杖の少年は気圧される。しかし気圧された自分が悔しかったのか、ずいっと一歩踏み出して、ナオをにらみつけて言う。

「お前頭おかしいんじゃない？ だってこいつハゲだぜ。ハゲがかわいいわけじゃないじゃん」

ナオは目の前で威圧する松葉杖の少年に一歩も引かず言い返す。

「ちがうよ。髪がないから本当のかわいさがわかるんだよ」

「なに言ってるんだ、お前」

「目鼻立ちのこと。髪がないのにかわいいってことは、本当にかわいい証拠なんだよ」

松葉杖の少年にはナオの言うことがよく理解できないようだったが、ナオの、自分が正しい、と信じるまっすぐな目に、思わず身体が逃げ腰になる。

「ばっかじゃねえの。こいつのどこがかわいいんだよ」

それでも負けじと少年は言い返すが、ナオもまったくひかない。

「かわいいよ。でもそんなことより、人間、顔じゃないんだよ？

大切なのは心だもん。お前、女の子をいじめるなんて最低だよ」

「なんだと？」

少年の身体に怒気が膨れ上がり、いまにもナオに殴りかかりそうになる。

しかしナオもまたそこを一步も動かない。

しばらくにらみ合いが続く。

松葉杖の少年は、ナオが左腕を包帯で吊っているのをちらっと見る。

自分が怪我をしているのは脚だ。

どっちが有利か計算したのだろうか、やがて、

「けつ。かつこつつけてんじやねえ、ばーか！」

捨て台詞をはいて、松葉杖の少年は休憩室を出て行った。

休憩室全体に、安堵のため息がもれる。ちいさく手を叩く老人もいた。

ナオは、おさがせしました、と休憩室全体に頭を下げた後、

「ここ、座つてもいい？」

と、まだ固まったままでいたちかに訪ねた。

ちかが、ぎこちなく、なんとかうなづくと、

「ありがとう」

そう言つてナオはちかの座っているソファのとなりに腰を下ろした。ちかの座っているソファは、もともと三人がけだから、ふたりで座つても、不躰な距離にはならない。

ちかはナオがなにか言うかと思つて、どきどきした。

助けてくれた少年に、なんてお礼を言おうかと考え、緊張してそれだけで頭に血が上った。

が、ナオはソファに腰を落ち着けると、とくにちかには何も言わず、吊っている左腕の包帯の隙間から文庫本を一冊取り出して開き、器用に右手だけで本を支えると、読み始めた。

どきどき。

どきどき。

どつしよつ。

どつしよつ。

なにか言わなくちゃ。

お礼を言わなくちゃ。

ちかの心臓は高鳴ったが、ナオはあれつきり小説に没頭している。ちかのことはすっかり忘れて物語のなかに入り込んでいるらしく、声をかけるタイミングがつかめない。

やがて、それから一時間も経ったころだろうか、ナオが本から顔をあげ、んーと自由になる右腕で伸びをして、中庭に目を向ける。

そのひょうしにちかが本を開いていないのに気がつく、ナオは

気さくに話しかけた。

「こじ。いい場所だねー。すごく落ち着く」

いきなり話しかけられたので、くちのなかがからからに乾いてい
たちかは声を出せず、かろうじてうなづいた。

ぎこちなく首を動かして、ちかはナオを見た。さつきあの粗暴な
少年に一歩も退かなかった凜々しさがうそのようなやさしげな面持
ちの少年だった。ちかは勇気をふりしぼり、こくつとつばを飲み込
むと、声をかけた。

「あの。さつきはありがとございました」

ナオはきよとんとしたあと、ああ、と笑う。

「なんか頭にきちゃって。思わず」

ぼりぼりと頬をかきながら照れくさそうにナオは答える。

「だってさ、あいつ言ってることめちゃくちやなんだもん」

照れくさそうにしていたと思ったら、今度は、まったく、とほお
をふくらませる。表情がころころ変わるナオを見ていると、ちかの
心も軽くなってくる。

ちかは助けってもらってうれしかったけど、ひとつだけ気になっ
ていたことを思いきって言ってみた。

「あの。でもかわいいっていうのは、言いすぎかも」

「そんなことないよ。かわいいよー！」

ナオはすぐに否定して、じつとちかの顔を見つめる。

かわいいとは言われても、丸刈りの頭は気になるし、いままで自
分のことをかわいいだなんて一度も思ったことのなかったちかは、
ナオの視線に耐えられず真っ赤になって下を向いてしまう。

「あ、ご、ごめん。じつと見たりしちゃって」

ナオはそんなちかの様子に狼狽してあやまる。それから、

「えっと、僕、今日からここに入院することになった夏目です」

あらためてそう名乗った。

ちかも顔をあげて、名乗り返す。

「わたし、小林です」

「小林さん、しばらくよろしく」

「こ、こちらこそ」

お互いの挨拶が終わると、ふと、ナオが休憩室の壁にかかっている時計を見て、あっ、と声をあげる。どうやらなにか用事があるようだった。

ナオはちかに訊ねる。

「また来てもいいかな。ここ、居心地いいから」

「も、もちろんです」

上ずった声でちかが答えると、ナオはにこつと笑う。

「よかった。本の感想の話もしたいんだ」

「え？」

「ほら、見て。気がつかなかった？」

ナオがちかに見せた文庫本は、いまちかが読んでいる小説と同じものだった。『泣き虫ホーリーの冒険』。一昔前に流行った魔法使いの少年が主人公のファンタジー小説。ちかが持っているのはハードカバー版だったから、同じ本を読んでいるとは想像もしなかった。それどころではなく緊張していたし。逆にナオのほうは、ちかの持っているのがハードカバー版だったから、すぐに本のタイトルを目に出来たのかもしれない。

「ね？」

ナオがにこつと笑う。

「ほんとだ。偶然ですね」

ちかも笑うと、ナオはわざと未見にシワをよせ、太い声を作ってみせ、

「いやいや、これは運命ですよ」

とその小説に出てくる大賢者の物まねをしてみせる。

「……」

「ぼかん、とするちか。」

そんなちかを見て、やつちやった、と後悔に頬を赤らめるナオ。その恥ずかしがるナオを見て、ちかがぷつと吹き出す。

吹き出したちかにつられて、ナオも笑う。

「それじゃ、また……明日？」

「はい。また明日」

ナオはそう言っただけに手をふり休憩室を出て行った。

これがちかとナオの出会いだった。

それからちかとナオは、毎日のように休憩室の中庭近くのソファに並んで座り、小説を読んだりその感想を言い合ったりして過ごした。それは実際にはわずかに二週間にも満たない短い時間だったが、ちかにとっては永遠にも思える、まるでこの世とは思えない不思議な時間で、そしてそんな夢のような時間のなかで、ちかはナオに恋をした。

ナオは彼が自分で言ったとおり、ちかの丸刈り頭のことをまるで気にしなかった。女の子として、どうでもいいってわけではないのだ。なにかのひょうしに手と手が触れでもすれば、照れ笑いを浮かべたりするのだから、ちゃんとちかを女の子として意識したうえで、気にしていなかったのだ。

そのことは、ちかに自信をもたせた。自分は本当はかわいいのだ、ということではない。大切なのは心だ。それを信じていれば、いつかは必ずナオくんのようにわかってくれる人にもっと会えるっていうことに。

もちろん、ちかだって女の子だから、かわいい、って言ってくれたことも信じたかったけど、毎日鏡を覗いても、そこには無残な丸刈り頭の自分がいるだけで、こればかりはなかなか信じられなかったけど。

ちかが、学校に行ったら笑われるかも、って悩みをもらしたときには、ナオはこう答えた。

「本当の小林さん知らないひとのことなんて、気にすることないよ。学校には人がいっぱいいるからわかってくれないひともきつと

いるけど、わかってくれるひとだっというばいいるはずなんだから」
ちかはそれでもやっぱりふっきれなかった。

「でもわたし、くじけちゃうかもしれない。わたし、チビだし、ど
んくさいってよく言われるから。それなのに、今度はこんな頭を見
られたら……」

「ちいさくたっていいじゃない。僕の友達にもんびり屋がいるけ
ど、どんくさくたっていいんだと思う。自分のペースでしつかり歩
んでいけば。あと顔なんて飾りなんだし、髪だって生えてくるんだ
から、全然気にしなくていいと思うな」

「飾り…… やっぱり、かわいい、言ってくれたのは、嘘だったんだ
……」

「ち、ちがうよ、それは本当。でもさ、ほんと大事なのは心だから。
それだけはほんとだから」

ナオの行動はナオの言っていることを裏切っていないくて、それは
ちかに勇気を与えた。

ちかは高校生になっただいまでも、地味で目立たなくて、とくにか
わいい顔をしているとは思っていないが、あのころ、手術跡のまだ
髪の毛の少ない頭で人前に入る勇気をくれたのは確実にナオだった。

ちかが思ったとおり、退院して学校に行つたところ、いじわるな
子たちにさんざん、ハゲハゲとからかわれたけど、ちかがくじけず
笑っていられたのは、ナオのおかげだった。

それは、ナオの言葉に触発されてがんばったちか自身の成長では
あつたが、ちかはそれをふくめてナオに感謝をし、そしてますます
彼に対しての想いを深めた。

しかし、ちかが退院して学校に通えるようになったころには、ナ
オはもうちかの近くにはいなかった。

もともと軽い骨折だったナオはちかよりも先に退院し、さらにこ
の町からも引越して行ってしまったからだった。

ナオがどこに引越していったのか、ちかは知らない。

あれほど仲良くしていたのに、お互い住所を聞けなかったのは、

あまりにも仲が良かったがゆえの若気の至りなのだろう。

楽しい、夢のような時間の最後は一二月二四日。

折りしもクリスマスイヴ。

「これ。クリスマスプレゼント。僕、いまほかににも持ってないから……」

退院するナオを病院の玄関まで送りに来たちかにナオが渡したのは、二人が初めて出会ったときに二人とも読んでいた、あのファンタジー小説の文庫本だった。

「小林さんが読んでいたのって、図書館から借りた本だったでしょう？ だからどうかなって思ってた」

ナオは少し悔しそうだった。もったいいものを渡したかったのに、という想いが表情に思いつきり浮かんでいた。

でもちかとしてはこれ以上にならない嬉しいプレゼントだった。

二人の始まりのときを一緒に過ごした本。二人が一緒にいた記念としてこれほど素晴らしいものはなかったから。

むしろちかのほうが悔しかった。

気の利いたプレゼントがなにも思いつかなかった。

お別れなのに。

もう二度と会えないかもしれないのに。

「あの。わたしからは、これ……」

それでも一所懸命考えた最後のプレゼントを、ちかはナオに差し出した。

使い古した革製の本の鞆。

ちかが大事にしていたお気に入りの品ではあるけど、他人からみたらただの古びた革つきれにしか見えないしろもの。

ううん。やっぱりこんなのだめだ。ナオくんに、嫌がられちゃう！
そう思って、

「あの」

「やっぱりごめんなさい、と引つ込めようとしたとき、

「ありがとう！ 大切にする！」

ナオはちかの手から大事そうにその棊を受け取った。

使い古しだからって、嫌がっている様子はまったくなかった。本
当に嬉しそうに、ナオの本をもらったちかと同じくらい嬉しそうに、
ナオはほほえんだ。

そこで、ナオに声がかかった。

迎えの車が来たのだった。

ナオはぺこりと、迎えの車から降りてきた年配の男女に向かって
頭を下げる。どうやら迎えに来たのは親ではなさそうだった。年配
の男女は、病院の玄関まで迎えに来ようとはせず、腕時計とナオを
ちらちらと交互に見ながら車のわきで待っている。

「それじゃ、行くね。いろいろありがとう。小林さんと話せて、と
ても楽しかった」

「い、いえ。わたしこそたくさんお話できて嬉しかったです。……
それから、助けてくれたことも、はげましてくれたことも、とても
嬉しかったです。ありがとうございました」

ちかは本を持った両手を身体の前でそろえて、ぺこりと頭を下げ
た。

ちかが頭をあげると、ナオはなにか言いたげにちかを見つめてい
た。

ちかももつとなにか言うことがあるような気がして、焦る。

そのとき、車のクラクションが鳴った。早く来い、ということら
しい。

ナオはあわてて、やはりナオを送りに出てきてくれていた担当の
看護師さんに頭を下げると、

「また、いつか会おうね！」

ともう一度ちかの目をまっすぐ見つめて言うと、きびすをかえし
て、迎えの車に向かって歩き出した。

「は、はい！ またいつか！」

一拍おくれて、ちかもナオに言い返した。

ナオはふりかえり、嬉しそうに笑って手をふった。

そうして、ナオはちかの前から去っていった。

それから数年が経ち、ちかの両親は円満にはあつたけど離婚をして、ちかの名字は小林から母親の旧姓である織部に変わった。もちろん髪は生え、もとの地味で目立たない本の好きな、でもいつでも心は前向きでいられる少女にちかは成長した。

やがてちかの高校受験を転機にちかとその母親は想いの丘ニュータウンに引っ越してきて地元の高校に入学、そして二年に進級した春、ちかはもう二度と会えないだろうと思っていた初恋の少年と再会した。

(10) へ続く

(10)

「手袋はOK?」

「お〜!」

「帽子はかぶった?」

「お〜!」

「それじゃ行こうか」

「お〜」

みなもは元気よく手を突き上げて上機嫌に歩き出す。

昨夜は大変だった。

学校に連れて行かなかったものだから、みなもはすねまくっていた。
なにを言っても、にゃー、としか答えない。

一瞬、まさか猫化が進んで人間の言葉をしゃべることができなくなったのかとあわてたけど、そうじゃないことは、みなものすねている表情でわかった。

ファミレスに行くのではなく、お弁当を買ってきてしまったこともみなもの機嫌を損ねた。わざわざみなもの好きな、とりからのり弁当を買って帰ったのに、このところ何故かファミレスのメニューをはやく消化することにご執心のみなもは、不満のにゃーを返すだけだった。ちゃんと食べたけど。

想いの丘にまつわる話や、丘にある神社に行ってみようという提案にも、にゃーとしかみなもは答えず、一日くらい学校に行けなかったのがなんでそんなに不満なんだろうと僕は不思議に思い、明日神社にちゃんとついてくるだろうかと少し不安になりましたのだけど、そこはみなも。一晩寝たら昨日の不満はさっぱり忘れて上機嫌

いつまでも根に持たないのはみなものいいところだ。悪く言えば、単純、忘れっぽい、って言い方もみなもには当てはまるんだけど。僕に注意されたこととかも一晩で忘れるしなあ……。

とにかく朝みなもの家を訪ねると、昨夜のすねっぷりが嘘のように上機嫌だった。

神社、どんなところだろうね、なんてむしろわくわくしている様子。学校休んで行くことになるんだけど、いいの？ と訊いても、うん、だってナオちゃんと一緒にだもん、とあっさり。どうやら昨日も学校自体はどうでもよかったらしい。生まれたころからずっと一緒にいるのに、いまさらなにを言っているんだか。

学校には病欠の電話を入れた。みなもの欠席理由を風邪にしておいたので、それが僕にもうつったことにしておいた。

そして、クラスメートや先生に行きあってしまわないよう学校の登校時間から充分経った午前九時三〇分を過ぎてから、僕たちは想いの丘に向かって出発した。

想いの丘は僕たちの家から歩いていける。散歩がてらにゆっくり歩いて一五分かからない。そこからさらに町を見下ろすことのできる頂上付近の見晴らしまでも一〇分程度。子供でも老人でも気軽に散策を楽しむことが出来る。

僕とみなもは、通勤通学が一段落した静かな住宅街をのんびりと歩く。

もつとも、みなもとと一緒にいてのんびりしていなかったことなど、さっぱり思い出せないのだけれども。

「静かな住宅街って、ちょっとわくわくするね」

みなもが後ろ手にスキップするように歩きながら言う。

僕も同意する。

「わかるわかる。誰もいない町っぽくて、ちょっとジューブナイルSFみたいな感じでしょ？」

「そうそう!」

みなもは、両手が猫の手になり、頭には猫耳が生えている。今日
はなにも変化がなかったようだけど、とんでもなく異常な状態だ。
でも、みなもと話していると、どうにもせっぱつまった気持ちにな
れない。だってそもそも当事者であるみなもが、まったくあわて
ていないばかりか、猫になることをかわいいからと喜んでいる節ま
である。というかあきらかに喜んでいいるものだから。異常事態を
前に、焦らず平静でいられていると言えば聞こえはいいけど、実際、
これはいいことなのか悪いことなのか。

僕にはとうていいいことには思えないんだけど。

となれば、僕だけでもちゃんとみなものことを考えなくては。

思いを新たにし、自分を鼓舞するように僕はみなもに言う。

「よし、みなも。今日こそはがんばってもとにもどる手段を見つけ
るぞっ!」

しかしみなもは僕の突然の意気込みにきよとんとしたあと、こら
えきれないといった様子でくすくすと笑う。

「急にどうしたのナオちゃん。ナオちゃんに熱血って似合わないよ
?」

うるさいな。

みなもが真剣にならない分、僕ががんばろうって決意しているん
じゃないか。まったくもう。

というわけで僕はみなものんびりペースと戦いながら、似合わ
ぬ熱血魂を燃やそうと努力してみたわけなのだけど、織部さんが川
添さんに聞いた話に出てきたらしき神社は、なかなか見つけること
が出来なかった。

たしか、神社は想いの丘の森のなかにあると織部さんは言ってい
た。想いの丘は、頂のあたりは緑の芝で見晴らしがよく、そこに登
るまでの山道が森に覆われている。森、といっても林に毛が生えた

程度のものでそれほど深いものではなく、山道も、老若男女誰でもが歩ける程度のハイキングコースみたいなものだ。僕とみなもはそのハイキングコースを端から端まで歩きまわった。いくつかある道の分岐も、残らず歩きまわった。

しかし神社らしきものは影もかたちもない。

しかたがないので、思いきって、ハイキングコースから外れた、山道や私道というよりは獣道といったほうがいいような雑木に囲まれた道をも、枝葉を腕でのけながら歩いたりもした。

しかし発見できたのは古びたちいさな廃屋がひとつだけで、やはり神社らしき建物は見当たらなかった。

丘の頂にも登ってみた。

しかし、頂から三六〇度森を見下ろし透かしてみても、それらしき建物の影は見当たらない。

やがて正午を過ぎ、午後一時、二時を過ぎたところで、僕もみなもも疲れて気力が果てた。なにより、昼食もとらずにちいさな丘とはいえ山道を歩きまわったのが効いている。食は人間の根源的な活力だと思う。

「ナオちゃん」

「うん？」

「おなか、ぐー」

「うん」

僕たちにはもう、このあとまだまだ神社探しを続行するか否かを決める気力さえもなかったなので、ともかくふもとに下りてなにかを食べることにした。

へとへとの僕とみなもは、もう口もきかずに山道を降りていく。

と、その途中だった。

巫女さんがいた。

白い和服に緋色の袴。

まちがいなく巫女さんだ。

とてもちっちゃいけど、巫女さんだ。

ランドセルを背負っていて小学生にしか見えないけど、巫女さんだ。

……ってランドセル？ 小学生？

巫女服の白と緋色の袴に、妙にマッチした赤いランドセル。

髪を左右ふたつのおさげに結わったかわいらしい顔立ちの、少女？ 幼女？ とにかくちっちゃい巫女さんは、僕とみなもが見つめるとじろりと見上げてきて、歳に似合わぬ生意気な口調で僕たちに問うた。

「なんだ、お前たち。わたしに用でもあるのか？」

「え、う、うん。たぶん……」

いきなり訊かれてくちごもってしまった。この子が本当に巫女なのなら、おそらくはこの丘にあるという神社の関係者だろう。だったら用があるのはまちがいないのだけど、なぜそれがわかったのだろうか。

小学校三年生か四年生くらい、それ以上には見えないランドセル巫女は僕の答えを聞くと急に笑顔になる。

「おお。あてずっぽうに言ったのだが、本当にそうだったか。ささ、神社はこつちだ。ついてくるがいい」

あてずっぽうだったらしい。

ランドセル巫女少女は、山道を外れ、ずかずかと獣道に入っていく。僕とみなもが顔を見合わせていると、

「なにをしている。早く来い」

ランドセル巫女にどやさね、思わずせかされるままにあとを追いはじめた。

(11)へ続く

(11)

「客なんかめつたに来ないからな。大歓迎だぞ」

途中からそうではないかと思いついて始めていたのだけど、そのランドセル巫女に連れて行かれたのは、午前中に一度目にしていたあの廃屋だった。

しかしどこを見ても神社らしき様子は見当たらない。

今にも崩れ落ちそうな平屋建てのちいさな廃屋がひとつ、そしてその横には廃屋の一部が壊れたような、焼け焦げた丸太や石材がごろごろと転がっているだけ。本殿どころか、鳥居さえ見当たらない。

「あの、ここが……神社なの？」

「そうだぞ。小姫神社だ」

「小姫神社？ わ、かわいい名前」

ここが本当に神社かどうかかなり疑わしいま、名称などどうでもいいのに、みなもがかわいさだけに反応してはしゃぐ。

「そうだろうそうだろう。わたしの名前が小姫だからな」

ランドセル巫女は偉そうに、まだほとんど目立たぬ胸をそらし、満足気に答える。

その台詞にひっかかり、僕は訊く。

「きみが小姫だから、小姫神社？」

「そうだぞ。なにか問題があるのか？」

「いや、別に……」

この子の親が神社の名前から娘を名づけたのだろうか？ ともある問題があるのか、と訊かれれば、そこに問題があるのかどうかなど部外者の僕にはわからず、僕はすくすくこと引き下がる。

なんだろう、この小姫という女の子、ランドセルをしょっている

ところからすると、小学生だろうに、妙に威厳があつてなんだか逆らえない。よく考えると、巫女服にランドセルなんて、妙なコスプレして思えないこともないのに。

「ん？ まだなにかあるのか？」

じろじろ見てしまっていたのか、ランドセル巫女　小姫ちゃんが見上げてくる。

僕が首をふると、そうか、とうなづき、焼け焦げた木材や石材の積み重なっている一角を指差す。

「ほら。お賽銭ならそこだ。たーんとお布施しておくれ」

丸太や石材は、昨日今日崩れて積み重なったものではないようだ。木々の合間からは雑草が生え、石にはコケが生えている。この廃材が建物だったのは、もう十何年、少なくとも数年単位の昔だっただろうと思えた。

その廃材の重なった隅に、一膳用の丸いちいさなちゃぶ台が置いてあった。雨ざらしになつているのだろう、すっかり色あせていて、おそらく廃材と同じくらいの年月をここに放り出されていると思われるちゃぶ台だ。

そのちゃぶ台の上に、賽銭箱……を模したおもちゃの貯金箱が置いてあった。寺社が多くて有名な旅先のお土産屋さんでよく売つてそうな、安っぽいプラスチックの貯金箱……。

「どうした？　ほれ、ちゃっちゃとたんまりお布施をするといいぞ」
小姫ちゃんは、さあ早くしろ、とばかりに僕とみなもをせかす。

「いや、でもこれって……」
「貯金箱？」

僕とみなもは顔を見合わせて首をかしげる。

財布を開かない僕とみなもの様子に、じれたように小姫ちゃんが言う。

「なんだ？　お布施しないのか？」

「いや、だって……」

からかわれているのだろうか。

それともお小遣いが欲しい小学生の、たわいのないいたずらなのだろうか。

戸惑う僕たちに、小姫ちゃんは露骨に眉をひそめる。

「なんだ冷やかしか。なら帰れ帰れ」

急にそっけなくなつて、小姫ちゃんは僕たちを追っ払うようにぞんざいに手をふる。

なんとというか、げんきんな子だ。

小姫ちゃんはそのまま廃屋のドアをがたがたと引き開けて中に入つていこうとするので、僕はあわてて呼び止める。

「待つて待つて」

「なんだ。まだ用があるのか？」

いちおうふりむいてくれるが、すでに興味を失つたそっけない口調で答える小姫ちゃん。

「ご両親はいないのかな？」

妙に堂々とした子なので思わずペースに乗せられてしまつていたけど、本当にここが神社　小姫神社というかどうかはともかく

ならば、小姫ちゃんの親あるいは保護者である神主がいるはずだろう。そう思い僕は訊いてみる。

が。

「そんなものはいないぞ。ここにはわたしひとりだ。わたしがひとりで管理している」

「え？」

「小姫ちゃん、ひとりなの？」

僕とみなもは驚く。

ひとり暮らし？　こんなにちいさな子が？

僕とみなもは、幸か不幸か（幸だと思つている）後見人があまり真面目でなくほつたらかしてくれているので、まだ高校へ通う身ながらひとり暮らしが成立しているわけのただけ、こんなちいさな子のひとり暮らしって許されるのだろうか？　児童保護の法律とか、そういうのがあるんじゃないのかな？

とかなんとかよそ様の事情にいらぬ懸念をしている僕の横で、みなも小姫に難癖をつけられていた。

「?ちゃん?をつけるな、?ちゃん?を。わたしのことは、姫、と呼べばよい」

姫って。

それは果たして呼び捨てていい、という気安さの表明なのだろうか。

「あるいは、?さま?づけでもいいぞ」

やっぱり、気安さの表明ではないらしかった。

まあ、それはそれとして。

「それじゃ、その、姫。きみがこの管理人なら　　というか、ここ、本当に神社なんだよね?」

「なぜに疑う」

「いや、だって。鳥居も建物もないし」

僕の懸念を小姫ちゃん(心のうちならこう呼んでもいいだろう)は笑い飛ばす。

「あんなものは飾りだ。わたしがいればことは足りる」

いや、飾りつてことはないと思うんだけど。

僕はなんだか途方にくれてしまう。

僕はいま、とんでもなく無駄な時間を過ごしているのではないだろうか……。

いやしかし、午前中からいままで、これだけ探してほかに神社は見つからなかったのだ。そして、このランドセル巫女の小姫ちゃん、神社はここで、ここを管理しているのは自分だという。

正直、なんだか子供のおままごとに付き合わされているような虚脱感があるにはあるんだけど、でも、小姫ちゃんが巫女服を身に着けていることだけはたしかなんだよな。って、そういえば小姫ちゃんってあの姿で小学校に通っているんだろうか……いやまあ、それはいいとして、僕は「巫女服を着ている」ってところだけに一縷の望みをかけて、小姫ちゃんに訊ねる。

「あのさ。それじゃ訊きたいことがあるんだけど、いいかな」

「よくないぞ」

小姫ちゃんは即答。そしてとことこちゃぶ台に据えてある貯金箱 もとい賽銭箱の横に立ち、腕を組み仁王立ちになる。そして僕たちを無言でじーっと見つめる。

なにも言わないけど、言いたいことはよくわかった。

はあ、とため息をついて、僕はその貯金箱 もとい賽銭箱に歩み寄った。

みなももついてきて、ふたりで財布を開き、お金を入れようとして その貯金箱もとい賽銭箱が妙なつくりをしていることに気がついた。

「あの。これ、お金が入らないんだけど」

コインを入れるはずのスリットが、横には広いのだが異様に狭い。手に持った百円玉（十円玉だと気を悪くしそうなので奮発した）は、どう角度を変えても入らない。

僕にならって同じく百円玉を持ったみなもとふたり、小姫ちゃんを見上げる。

賽銭を入れるためにしゃがんだ僕たちを小姫ちゃんは横目で見下ろし言う。

「入らないなら入金を入れればよからう」

……つまり紙幣を入れろってことですか。

ああもう帰ろうかな、と一瞬思う。しかし、いまはみなもの猫化を直すための情報を少しでも手に入れなければいけないときだと思いい直し、なくなくもう一度財布を開く。

取り出すのはもちろん野口さん。

僕たちは亡くなった両親の遺したお金で不自由なく暮らしているけど、大半の資産は成人しないと僕たちの自由にはならない。最近はずっとファミレス通いをしているけれど、普段はふたりで変わればんこに自炊生活をしていてけっこう地道な生活をしているのだ。出費は押さえるに越したことはない。

何も考えずに諭吉さんや一葉さんが出てきそうなみなもの財布からも先んじて野口さんを引き出すと、一枚ずつ貯金箱もとい賽銭箱にお布施をする。

「……まあよいだろ」

僕たちの様子をうかがっていた小姫ちゃんが、やれやれといった様子でうなづく。

いや、二千元って、貧乏高校生にしてはそれなりに高額なんですが。

小姫ちゃんは、貯金箱もとい賽銭箱をひよいと抱えると、空いたちゃぶ台に腰を下ろし僕たちを見る。

「さて。訊きたいことはなんだ？ わたしの好物でも知りたいのか？ そんなことならいくらでも答えてやるぞ」

なんでわざわざ二千元も出して今度来るときのお供え物リクエストなんかを訊かなきゃならないんだ。

「なにが好きなの？」

みなもも訊かなくていい。

「いちご大福。最近一番のお気に入りだ」

味と食感を思い出しているのか、目をつむりうむうむとうなづいている小姫ちゃん。

「いちご大福、おいしいね。うん、わかった。いちご大福、と。あとは？」

「みなもは黙ってて」

天然ボケ幼なじみを黙らせると、僕はいきなり本題に入る。まわり道はもう、さんざんしたような気がするし。

「想いの丘にまつわる伝承について、教えて欲しいんだ」

僕がそづくちになると、小姫ちゃんの目がすつつと細くなる。が、それは一瞬で、すぐに平静な無表情になり、逆に訊いてくる。

「お前たちはどんなことを知っているんだ？」

僕は、織部さんから聞いた話を繰り返した。さすがにばかばかしいと笑い飛ばされるだろうかと思いつつも、UFOが落ちたなんて

うわさまであることも話した。

「うん。わたしも聞いたことがある話だな。よくある昔話に、都市伝説の類だ。どれも非現実的だがな」

話を聞き終えると、小姫ちゃんはあっさりそう断じた。

「非現実的。そう思いますか？」

小姫ちゃんの返答は、背格好に似合わず、大人びた理知的なものだ。僕は思わず敬語になり、そう聞き返す。と、

「そうは思わないのか？」

「またも小姫ちゃんは聞き返してくる。」

「思いません」

これは試されているのだ。僕はそう直感的に感じていた。ここで引き下がるようなら小姫ちゃんからはなにも聞き出せない。

僕は賭けに出た。

小姫ちゃんが僕を試しているという読みが間違っていれば、僕たちは隠しておくべき秘密を赤の他人にもらしてしまうことになる。相手が小学生とはいえ、彼女のくちから風聞が広まれば、みなもになにか危険なことが起きるかもしれない。

しかし、ここはカードを切るべき場所だと僕は判断した。

だから、僕は、みなもに手袋と帽子を外させた。

腕は肘までまくってみせる。

左右の猫の手と、猫耳があらわになる。

みなもは毛に覆われているとはいえ素肌をさらして寒いのか、ぶるつと身体を振るわせる。

小姫ちゃんの表情は変わらなかった。

ただみなもを見つめている。

驚いてはいないし、ばかばかしいと笑ったり、からかっているのかと怒ったりもしない。

ただ、ぼつんと、

「願ったのか」

とみなもに問いかけた。

「うん」

とみなもは答えた。

小姫ちゃんほうなづき、

「ならしかたないな」

あつさりと言つ。

「そつかあ」

みなももまたあつさりとそう納得する。

つて、そうじゃないでしょ！

「あの、しかたないって、どういう……この現象について何か知っ

ていたら教えてくれませんか。猫になるのを止める方法を何か……」

「止められん」

小姫ちゃんは一言で斬つて捨てる。

「え？」

ついていけなくて聞き返した僕に、小姫ちゃんは繰り返す。

「一度願つたら、止めることはできない」

「そんな……」

僕はそのまま絶句する。

……ううん、いや待て。この子は本当に想いの丘の伝承について詳しいのか？ 僕たちが驚きそんなことをいたずらで言っているだけってことはないか？

正直、小姫ちゃんの様子にふざけている様子がないことは自分でもわかっていた。でも僕には、問いかけるのを止めることはできない。みなもを助けることができないなんて事実を認めるわけにはいかない。だから小姫ちゃんを試すように訊いた。

「そもそも、想いの丘ってなんなんですか？ みなもが猫になっていくのと同じような関係があるんですか？」

小姫ちゃんはもうもったいぶることはなく答えてくれる。

「その名の通りだよ。想いの叶う丘……いや、正確には、想いが？ 叶ってしまう？ 丘、だな。お前　みなもか。みなもは猫になることを願つたのだろう。だから、丘は、その願いを叶えている、そう

いうことだ。そして、一度願った願いは、叶うまで止まらない。つまり、叶ってしまっ、だ」

僕はすぐに反論する。

「そんな……ううん、でもそれはおかしいですよ。この世の人、ううん、この町の人に限ったって、誰だって願いの一つや二つは持っているものでしょう？ その願いがすべて叶っていたら、この町はそれぞれの願いと願いが矛盾してぶつかりあって、大変なことになってるはずじゃないですか」

「想いの強さの問題だ。生半可な想いでは、想いの丘は願いを叶えぬ」

「みなもが、それほど強く猫になりたいと願ったということですか？」

「そういうことだ」

「どうして!」

「それはわたしに訊かれても困る」

「どうして!？」

今度はふりかえってみなもに訊く。

みなもは少し困ったような顔をしたあと、

「うーん。猫さん、かわいいから?」

なんて答える。

「かわいいから、ってそんなことですか? ……そんなことで叶っちゃうんですか?」

後半は小姫ちゃんに訊く。

「すべては想いの強さの問題だからな。資質もあるが」

つまりそこまで強く、みなもは、「かわいいから猫になりたい」って願ったというのか?

人間の姿を捨ててまで?

そんなばかな。

「みなも、ふざけてる?」

僕はみなもに詰問するように詰め寄る。

みなもはやっぱり困った顔をし、でもきっぱりと、

「ううん。本当に、そう願ったよ、わたし」

そう答える。

「なんでそんなばかなことを……」

僕はがつくりとうなだれる。

みなもはそんなに人間の生活　ううん、僕との生活に不満を持っていたのだろうか。僕はなにか事件が起きるわけではないけど平和で平坦なみなもとの毎日に、けっこう満足していたっていうのに　みなもの猫化が止められないということと同時に、僕にはそのこともシヨックだった。幼なじみのみなものは、僕が一番よくわかっていっていると思っていたのに。

よほどひどい落胆ぶりだったのだろうか、小姫ちゃんがなくさめるように声をかけてくる。

「まあそんなに悲観することもあるまい。願いが叶うのだしな。そもそも古今東西、獣化なんてものはだな」

「あの、小姫ちゃん」

珍しくひとがしゃべっているのを遮ってみなもが小姫ちゃんに話しかけた。

「ん？　なんだ？　……ってだから？　ちゃん？　をつけるなというに小言を言いつつも、小姫ちゃんは気を悪くすることもなくみなもに向き直る。

みなもは僕を振り返り、後ろ歩きで小姫ちゃんに歩み寄りながら、僕に言う。

「ナオちゃん」

「うん？」

「女の子のお話」

「……わかった」

そんなときじゃない気がしたけど、ぼくはみなもと小姫ちゃんから少しはなれて後ろを向く。

みなもいわく、女の子には女の子にしか話せない秘密の話がある、

のだそう。初めてそう言ったのは小学校五、六年生のころだった
だろうか。ずっと家族のように育ってきたみなもにそう言われるの
は少しさみしいものがあつたけど、男の子にも男の子にしか話せな
い話があることにもうすうす気づき始めていたので、僕はうなづい
た。それ以来、みなもが、女の子の話、と言つたときには、少しは
なれて後ろを向くことが約束事になつてゐる。

みなもと小姫ちゃんの内緒話が始まる。

みなもの声はぼそぼそとほとんど聞こえないけど、とくに声をひ
そめようとしていない小姫ちゃんの声は聞こうと思つていなくても
聞こえてくる。

といつても、ふむ。まあ、そういうことだな。ん？ まあべつに
それはかまわんが。そうか、わかつた、そうしよう、だがその場合、
いやしかし、などと相槌を打つ言葉ばかりなので、話の内容はまっ
たくわからなかつただけ。

しばらくして二人の話は終わり、みなもが僕の元へ戻つてくる。

「話、終わったよー」

「なんの話だつたの？」

「むー。だから、女の子のお話」

やはり気になるので訊ねてみるけど、思つていたとおり教えても
らえない。

小姫ちゃんはというと、腕を組んでなにやら考え込んでいたが、
ふいに顔をあげると、僕に質問する。

「ナオ。お前はみなもが大事か？」

「え？ もちろんだけど」

僕は戸惑いながらも即答する。それはたしかなことなので、いま
さら恥ずかしがつたりしない。答えると、小姫ちゃんがその言葉の
真意を確かめるかのように真剣なまなざしを向けてきたので、僕も
真剣に見返す。

「猫は好きか？」

さらに小姫ちゃんが訊いてくる。

「好きだけど」

「ふむ」

小姫ちゃんほうなづき、

「まあ、お前たちなら問題ないだろ。仲良く暮らせ」

とあっさり話をまとめて、廃屋のなかに入っただけでいってしまふ。

「え？ ちょっと小姫ちゃん……!？」

僕があわてて廃屋に歩み寄ろうとすると、服の裾が引かれる。

「みなも？」

「ナオちゃん、おなか空いたよー。もう帰ろうよー」

みなもはもうすべて問題は解決したとばかりのさっぱりした顔、いや、さっぱりというか、おなか空いてへたった顔で僕に言う。

「いやそれどころじゃないでしょ。まだ猫の」

「いいのいいのー。ほら、もう、おなか、ぐぐって！　ぐぐって！」

みなもは駄々をこねる。

たしかに、小姫ちゃんからは、「一度願った願いは、叶うまで止まらない」というはっきりとした答えをもらった。そう答えられた以上、もう具体的になにか聞くことがあるわけじゃない。でも、こんなにあっさりあきらめていいことだとは、僕にはとうてい思えない。もう少し話を聞かせてもらって、なにか少しでも対処の指針が得られればと思うのだ。

そう考えるとあきらめがつかず、その場を動こうとしない僕に、みなもはわざとらしくため息をついてみせる。

「もお、しょうがないなあ、じゃあ、見て見て」

「なに？」

みなもを振り返ると、その瞬間、ひょい、と猫耳が消えた。

「へ？」

「えへへ。かっこいいでしょー」

かっこいいという評価は当てはまらないと思っけど、みなもは得意そうだ。

「消せるの？」

「さつき小姫ちゃんに教わったの。油断するとまた出てくるけど」
「早く教えてくれればいいのに！」

油断すると出てくるということは、根本的な解決にはなっていないということだけど、これはこれで問題対処のひとつの方向性が見つかったことに違いはない。

「えへへ。あとでファミリーレストランで急に帽子とってナオちゃんのこと驚かせようかなあって思ってたの」

「余計なことを計画しない」

「てへへ」

それから僕たちは丘を降りて、いつものファミレスに入った。

山道をさんざん歩きまわった僕たちはすっかり疲れきっていて、夕方入店してから、そのまま晩御飯の時間まで居座ってしまった。

その間に、みなもは猫耳だけではなく、左右両手も人間の手に戻してみせた。

僕とみなもは人間への変化（？）が成功するたびに、周囲の客に気がつかれないようにひそかにはしゃいだ。そのことで、僕はなんだか問題がすべて解決したような気分になってしまっていた。

願ったことは叶ってしまう、と小姫ちゃんは言った。

でもこうしてみなもは、人間の姿にもどることができる。

みなもの身に尋常ではありえない事態が起きているのはたしかだ。でも意外と今日みたいに、そのうちあっさりと解決してしまうのかもかもしれない。

疲れていたせいかもしれない。人間にもどることもできるということ、と、とりあえず当面の心配が消えたことも大きかっただろう。どうにもその日はもう、深刻な気分になることはできなかった。わからないことはいっぱいあるし、問題はなにも解決していないのに。

(12) へ続く

(12)

十二月二三日。クリスマスイヴイヴ。

今朝はけっこう寒い。みなもはタートルネックのシャツを着込んだ上に、マフラーを巻いていた。タートルネックのシャツはともかく、僕も家にマフラーを取りに帰り、巻きつけた。

みなもの身体の調子は昨日に引き続き良好だった。

ひよこつと猫耳を出したり引つ込めたりして見ては、ばかなことを言う。

「魔法少女にゃんにゃん」

「むしろ怪奇猫女？」

「むう。かわいくない〜」

またみなもが普通に学校へ行けるようになり、いつもどおりの日常がもどってきたようで、僕はほっとしていた。天気も良かった。

小春日和で、この世の中すべてが平和なように思えた。小姫ちゃんの言葉が頭の片隅に引つかかってはいたけど、なんだかそれは現実感を失っていた。その日一日、僕もみなもずっとおだやかだった。うっん。おだやかじゃないこともあった。

織部さんと、明日のクリスマスイヴの夜に会う約束をしたのだ。

もちろん、告白の返事をするためだ。

まだみなもの問題が解決したわけではなかったから、告白の返事なんてしているどころじゃないのではないかと思っただけど、みなもに、それとこれとは問題が別、とにらまれたからでもあった。もちろん、嫌々ではない。僕だって早く返事をしたかったのだから。

休み時間、僕は織部さんがひとりになるのを見はからって、すばやく話しかけた。織部さんにも、当然だけどその日僕が告白の返事

をするつもりだということがわかったから、真っ赤な顔でうなづいた。

僕は良い返事を返すつもりなことを言外にこめたつもりだったが、それは伝わっただろうか。織部さんは途中から真っ赤になり下を向きっぱなしだったから、緊張していて気がつかなかったかもしれない。そもそも僕自身こちこちに緊張していたから、言外に伝える、なんて高等なことはできていなかったかもしれない。

とにかく、賽は投げられた。僕が自分で投げた。もうあとは明日の夜、約束場所の想いの丘公園のベンチに行くだけだ。

夜、僕とみなもはファミリーストランのいままで頼んだことになかった残り全品を注文した。僕は乗り気じゃなかったけど、みなもが譲らなかつたから。全部で四品。ひとり二人前。へたすると、小食のみなもが一人前で僕が三人前。

昨日、夕方から晩までいたため、みなもに猫耳が生えた日の夜、弁当にしてしまったツケは払えていたけど、それでもこれだけの数が残っていた。

さいわいなのは、どれも最後の楽しみに取っておいた僕とみなもが大好きなメニューばかりだということだった。最近の僕とみなものお気に入りのビッグゴブサラダに、ハンバーグ、スパゲティナポリタン、オムライス。

「この品揃え、懐かしいねー」

みなもがにこにこと言う。

「まるつきりおこさまランチだからね」

「旗立てくださいって、お願いしようかな」

「やめなさい」

僕たちはもうまるつきりいつもの調子に戻って、ばくばくとメニューをたいたらげ、シメとしてデザートも頼んだ。デザートは早々に部門制覇をしたのち、あとは好きなものを頼んでいいことに決めていたので、僕たちはおこさまランチっぽいということで、シンプルな焼きプリンを頼んだ。

焼きプリンを前にして、みなもはにこにこ僕の顔を見つめていた。

「なに？ みなも」

「んー？ ナオちゃんと一緒に、全部制覇できたなーって」

「そうだね。ここ数週間大変だったよね」

「にははは。でも、贅沢な悩みだね」

「まあね。でもいつかはって思っていたことだから」

「うん」

ファミレスの全メニュー制覇は、もともと僕とみなもの両親が、冗談で言ったことだった。あの、クリスマスイヴにはじめてこのファミレスの、この窓際の席に案内されたときだった。お前たちが一緒にいるときは、記念にファミレスのメニュー全制覇だな！ なんてばかを言ったのは僕の父親だったろうか。僕には、一緒になる、の意味がそのときはわからなかったけど。けっきょく僕とみなもは、男と女というよりは、家族みたいなものになったけど。僕の両親もみなもの両親も亡くなり、ふたりだけで取り残されたあと、このファミレスは家族の思い出の残る場所となった。そしてあの日両親の誰かが言い出したファミレスのメニュー全制覇を、いつか僕たちでしようね、とどちらからともなく言い出し、食費を切り詰め自炊して、こつこつとお金をためた。そしてとうとう、今日の日を迎えた。みなもがクリスマスまでのメニュー全制覇にこだわったのは、はじめてここに来たあの日がクリスマスイヴだったからだろう。なぜそのクリスマスイヴ当日ではなく、イヴイヴの今日までに済ませようとしていたのかはわからないけど。

僕が想いにふけていたあいだも、みなもはにこにこ僕の顔をただ見つめていた。

プリンにもまだ手を出していない。

「なに？」

「ん？ なんでもないよ？」

「なんだよお」

本当にしあわせそうな笑顔。

こちらまでしあわせになるような。

……いや、こちらが不安になるくらいな？

なんだかこんなことが、ずいぶん前にもあったような気がする。

ただただ、みなもがにこにこ僕顔を見つめていた光景。

いつだっただろうか。

とても大切ななにかを忘れている気がする。

いつだったかな。いつだったかな。

思い出せない。

不安になる。

でも思い出せない。

思い出せない。

なんだろう、なんだろう、なんだろう……。

沈み込みそうになり、僕は、はっとする。

……そういえば、しあわせなときに不安を感じると、不幸になっ

ちやうつていうよな。

僕はいましあわせだ。

家族同然のみなもがしあわせそうな笑顔で僕の前において、いつか必ずと考えていたファミレス全メニュー制覇を達成して、そして明日は想いをよせていた織部さんに告白の返事をする。

これ以上のしあわせってあるだろうか？
ないない。

だったら僕が不安に感じることなど、ひとつもないはずだ。

(1 3) へ続く

(13)

クリスマスイヴの朝を、僕はいつになく満ち足りた気分で迎えた。みなもの問題はとりあえず現状維持で差し迫って危険なことはなさそうだし、昨夜は、両親が亡くなって以来の悲願を達成できた。

そして、夜には片想いをしていた女の子に返事をする。

しあわせななにもかもが揃っていて、これ以上なく満ち足り……
ううん、だめだ。

全然だめ。

織部さんに会うことを考えたらどきどきしてきてしまって、満ち足りた、なんて穏やかな気持ちではともいられなくなってしまった。

……だって返事をするってことは、僕もまた告白するってことで。僕もまた想っていたってこと、隠しておきたくないし。

もしかすると、告白されたときとか、一緒に帰ったときの僕の態度でバレバレだったかもしれないけど。ああ、どうしよう！

どきどきして、な、なんだか逃げ出したくなってきた。

き、緊張する。

うまく喋れるだろうか。っていうか、緊張しすぎてそもそも声が出ないかもしれない。

どうする？

どうする夏目ナオ！

って、待って待って。

少し落ち着こう。

僕の前に織部さんはまだいない。

っていうか、まだ朝起きたばかりで、布団から出てさえいない。

落ち着こつ、落ち着こつ。

今日一二月二四日は、僕たちの通う高校の終業式だ。三年生は期末試験後、受験対策ですぐに休みに入ったけど、一年生の僕たちは明日からが冬休みだ。

登校の準備を整え玄関を出ると、珍しくみなもがさきに出ていた。

「ナオちゃん、おはよー」

「おはよ。珍しくはやいね」

「うん。今日はナオちゃんを待ってたいなーって」

「そつか。いつも待っていてくれると嬉しいんだけど」

そうすれば遅刻ぎりぎりに校門を通り抜けることもなくなるし。

みなもは朝の支度ものんびりペースなので、けっこう焦ることが多いのだ。一緒に学校へ向かって走りながらも、焦っているのはいつも僕だけだけだ。

「えへへ。でも今日だけなのだ」

「なんでだよ。がんばりなよ」

「えへへ。だめなのー」

そう笑つと、みなもは、行こー！ と元気よく先導して歩きだす。まったく。気まぐれなんだから。

みなもは昨日に引き続き調子がよさそうだ。猫耳は生えてないし、手もいつもどおりのつるつる肌だ。うん、よかったよかった。

通学路を、みなもは、まるで目に焼き付けるかのように、ご機嫌にきよるきよるしながら歩く。

「学校行くのそんなに嬉しいの？」

「嬉しいよー！ だってナオちゃんと一緒に行けるんだもん」

なにを言っているんだか。

だから冬休みが終わったらまた学校始まるでしょうが。

「はいはい」

僕は、まったく、とあきれまじりに笑う。

ほんと、いつもどおりの朝。

今日は終業式しかなかったので、午前中には帰宅の途についた。教室では何度も織部さんと目が合った。

織部さんは照れ照れで、拳動不審にあちこちに目を泳がせた後、ぺこりとお辞儀をしたりする。

織部さんだけではなく、僕も顔が赤くなっているのがわかり、いそいそでお辞儀を返したりした。

はたから見たら意識しあっているのがばればれの光景だったと思うけど、幸いなことに、クラスメイトたちもまた、みなそれぞれクリスマスイヴというイベントや明日からの冬休みを前に浮き足立っているようで、とくに僕たちの様子に気がついた人はいなかった。

みなもや川添さん、光井さんを除いて。みなもはにこにこで見守っているし、川添さんたちは照れまくりの織部さんを、あたたかくちやかして(?)いた。

帰り道、僕とみなもは駅前のスーパーに寄り道をした。

毎年恒例のふたりで開くクリスマスパーティーの食材を買うためだ。

クリスマスケーキにチキン、それから僕とみなも、それぞれ一品ずつ作る料理の材料に、お菓子。

プレゼントの用意はすでに出来ている。

みなもの分と、織部さんの分。

みなもには新しい手袋。みなもが大好きなピンク色の、毛糸がふわふわしているやつ。

織部さんにはブックカバー。クラシックな図案の彫ってある革製のもの。休み時間などに本を読んでいる姿をよく見かけるから、いいかなと思って。

昨日の学校帰りに買いに行ったのだけど、どちらも選ぶのにすごく時間がかかった。そのわりにけっきょく無難なところを選んでし

まうのは、僕の地味な性格のせいかなあなんてちよつぱり苦笑したりもする。

正午には家に帰り着いて、みなもは着替えるために一度自分の家に戻る。

僕は台所にクリスマスケーキや食材の入ったビニール袋を置き、自室で着替えたあと、居間に入る。

居間には小さなクリスマスツリーが飾ってある。お互いの両親が亡くなったあとの初めてふたりだけで迎えるクリスマスなのに、みなもとふたりで買ったものだ。両親が毎年飾ってくれていた大きなツリーがあつただけで、当時の僕たちはまだ背が低かつたものだから扱いきれず、後見人から送られてきていたふたりのお小遣いを合わせて買ったものだった。それから毎年毎年、僕とみなもはクリスマスをこのツリーとともに過ごしてきた。毎年数日しか会わないけど、僕とみなもの三人目の家族と言つてもいいかもしれない。

クリスマスツリーのスイッチを入れ、ちかちかと電球が点滅し始めたのを確認すると、次に僕はテーブルクロスをひるげる。トナカイの引くソリにサンタの乗った姿が小さくいくつもプリントされている、いかにもクリスマスパーティー用に作られたつて柄のテーブルクロスだ。これは数年前に、駅前にある一年中クリスマスグッズを売っているファンシーショップでみなもが買ってきた。僕はそれを居間のソファ前のテーブルに広げる。テーブルはソファの高さに合った低めのもので、僕の家でパーティーを開くときはいつもここに料理を並べる。ちなみに、普段みなもとふたりで食事をするときには、台所のテーブルを使っている。

テーブルクロスを引き終わって、さて料理に手をつけるかなと台所に向かう途中で、みなもが来た。

なぜかわざわざチャイムを鳴らすのでドアを開けると、

「ナオちゃん、めりーくりすます〜！」

みなもは頭に紙製の三角帽をかぶり、両手いっぱい折り紙のリングで作った部屋飾りを抱えていた。

察するにチャイムはおでこ鼻の頭かなにかで押したのだろう。

「メリークリスマス。いつのまにそんなの作ってたの」

「へへー」

みなもは得意げに笑って部屋飾りの一部を僕に渡し、勝手知ったる僕の家、玄関を上がって居間に入っていく。

僕ももう一度居間にもどり、部屋の装飾を手伝うことにする。

十数分後、居間はふたりっきりのパーティーにしてはなんだかえらく華やかな様子になった。

「今年はずいぶんはりきってるね、みなも」

「うん！ がんばったよ！」

両手でぎゅっと握りこぶしを作るみなもの頭をよしよしがんばりました、となでて、僕たちは続けて料理にとりかかる。

僕もみなもも育ちが育ちなので料理は人並みにできる。

普段のんびり屋で失敗も多いみなもだけど料理は好きで、ときどき大失敗もやらかすけれども、総合的にみて僕より腕は確かだし、レパートリーも多い。

好きこそものの上手なれ、だなあ、と思う。

僕とみなもは並んで台所に立つ。お菓子もたくさん用意してあるので、手の込んだものは作らない。みなもは、僕たちふたりが大好きな野菜たっぷりサンドウィッチを作り、僕は春巻きの皮で巻いたチーズの揚げ物を作る。チーズ揚げは、ママーレードをつけて食べるととてもおいしいのだ。これもぼくたちふたりの大好物。

午後一時を少し過ぎたころ、パーティーの準備は整った。

僕が編集した、ふたりお気に入りのおクリスマスソングのつまったMDをかけ、僕とみなものささやかなクリスマスパーティーははじまった。

パーティーといってもふたりだけで行うものだから、特別ななにかがあるわけではない。

プレゼントを交換して、ケーキや料理を食べながら、ただいつもと同じくみなもとふたりでおしゃべりをしながら時間をすごすだけだ。ひとつだけ、この日だけにすることがあるとすれば、それは、幼い頃からの、両親たちが生きていた頃からのアルバムを見ることだろうか。

「メリークリスマス！」

僕とみなもは声を合わせると、まずプレゼントを交換した。

みなもからのプレゼントは万年筆だった。もちろん、何十万円もするような高いものではないけど、それでも僕たちにしてみれば少し背伸びが必要な、万年筆といえばここという有名メーカーのもの。「わ。すごい。いいの、みなも？」

「うん！ みなもちゃん、がんばりましたっ！」

以前、雑誌のインタビューで僕の大好きな作家さんがこのメーカーのものを愛用しているのを見てから、かつこいいなあいつかは一本欲しいなあと、みなもによく話していたのだ。急に用意できる金額ではないから、みなも、ずいぶん前から考えてくれていたんだな。すごくうれしい反面、僕は少し後ろめたい。

みなもに似合う手袋を選んだつもりだけれども、金額には大きな開きがある。プレゼントはお金ではなく気持ちとは言いつけれども。

「ねーね、ナオちゃん、似合ってる？ ね、似合ってる？」

でもみなもは、僕からのプレゼントを喜んでくれた。

みなもが無理をしてではなく本当に喜んでくれているのは、顔を見ればわかる。伊達に長い付き合いではない。

「鏡見てみなよ」

「うん。……わ。わたしにぴったりだよ。ね、すごく似合っているよね？」

「当たり前だろ。僕が選んだんだから」

みなもにどんなものが似合うのか、僕にわからないわけがないでしょう。

伊達に長い付き合いではない。

プレゼント交換が終わると僕たちは思う存分ケーキや料理やお菓子を食べ、それから僕たちはふたりがけソファに並んで座り、ふたりの前にいくつものアルバムを開いた。

僕たちは生まれたときから一緒だったから、アルバムの写真もほとんど一緒に写っている。

僕とみなもは一ページ一ページアルバムをひらいていき、あの時はどうだった、このときはどうだったと、笑いながら記憶をたどる。本当に、いつも一緒だった。僕はみなもがどんな風に育ってきたのかをなんでも知っているし、みなもも僕のことを何でも知っている。

だから、

「あ、この写真」

「言わなくていい」

「ナオちゃんがおねしょしたときの」

みなもがわざわざくちに出してそう言った途端、僕はぱらぱらとページをまとめてめくってとある写真ののっているページを開く。

「あっ」

みなもが気がついて声をあげる。

「動物園に行ったとき、みなも、トイレに間に合わなくて」

「わーっ、わーっ。もう、いじわるっ」

っていうか、息子がおねしょした証拠写真とか、娘が出先でお漏らししちゃった写真とか撮るなよな。まったく。もうこの世にいない両親に難癖つけてもどうしようもないけどさ。

ほかにも親たちが残してくれた本当に幼いころの僕とみなもの写真はいっぱいある。はいはいをして、どうやら競争でもしているらしきふたりの写真、近所の公園の砂場で泥だらけになって遊んでいる写真、ブランコに二人で乗っている写真、一緒にお風呂に入っている写真、旅行先で武士とお姫さまの格好をしてポーズを撮っている写真、真新しいランドセルを背負った入学写真。学校行事に家族旅行に何気ないスナップ写真、どれも僕とみなもであふれている。

そして、同じくらいたくさんある、ぼくとみなもと、その両親たちが一緒に写った写真。その写真のなかでの僕たちは笑っていたり泣いていたたりすねていたり、いろいろだけど、どの写真の僕たちからも親の愛情に包まれた安心感が伝わってくる。

やがて、両親たちの姿が写真から消える。あいついでお互いの両親が亡くなったのは、小学校三年〜四年にかけてのころだ。このころの写真は、ほとんどない。一時期僕はこの町を離れていたから、そのころの二人が一緒に写っている写真はまったくないし、あるものといえば学校行事でそれぞれ撮られたクラスの集合写真くらいだ。僕たちは毎年このあたりのページになると、どちらからともなく無口になって、ただページをめくる。そして、やがて一年近くの時が過ぎて僕が再びこの家に戻ってきたころからまたふたりの、今度は二人きりの写真が増え始めて、そのあたりになるとまたふたりの会話が弾み始めるのが常なのだけど、今日は、生まれてからこのかた、僕たちが唯一離れていた空白の一年間のあたりのページで、みなもがくちをひらいた。

「ナオちゃんがね」

「うん？」

みなもらしからぬ平坦な声に驚いて、僕はみなもの顔を見る。

「この年はね、ナオちゃんがいなかったクリスマスなの」

「そうだね。僕、ほかの町に行っていたから」

親戚をたらいまわしにされていたのだ。そのあいだにはちょっとした怪我をしたりもした。けっきょく遠い親戚の、もう顔さえも憶えていない親戚がかたちだけの後見人となり、いまに至っている。

みなもまた僕と同じように遠い親戚が後見人だ。

僕もみなも後見されているのは書類上だけでほっとかかれているけど、それは僕たちふたりにとってはありがたいことだと思っている。

「おじさんとおばさんは、まだクリスマスのころは亡くなってなかったよね」

「うん」

おじさんとおばさんは僕が親戚にたらいまわしにされているのを知って、引き取ろうと考えてくれていたらしい。しかしその矢先、不幸な事故に巻き込まれてみなもの両親もまたこの世を去った。

「でも」

みなもは続ける。

「ナオちゃんがいなくて、さみしかった」

「……そっか」

「うん。もうこんなのはヤダって思ったの」

「そっか」

僕もそうだった。おとうさんおかあさんがいなくなって、みなもとも離れ離れになって、僕はどうしていいかわからなかった。転校先の新しいクラスメートに誘われてクリスマスパーティーに参加して、僕はよく笑ってはしゃいだはずなのだけど、そのときの記憶はほとんど残っていない。みなものことばかりを考えていた気がする。どうしてここに、僕のとなりにみなもがいらないんだろうって、みなもの笑顔がないんだろうって、そればかり。

「でも、もうそんなことは絶対はないよ。ずっと一緒にいられるんだから。だから毎年こうやって」

僕がそう言おうとすると、みなもは途中で静かに首をふる。

「ううん。そんなこと言ったらもうだめだよ。ナオちゃんには織部さんがいるんだから、これからはそっちが優先だよ。もう大人なんだから」

「大人って、そんなの関係ないよ、僕とみなもには」

「じゃあ、わたしに好きな男の子ができれば、ナオちゃんはクリスマスと一緒に過ごすな、ってその男の子に言う？」

「う……」

いくら家族同然だからって、そこまでの権利は僕にもない。むしろ、みなもの幸福を願ってあげるのが家族の役割ってものだろう。

「ごめんね、ナオちゃん。変なこと言って。でも、ナオちゃんに好

きな人ができて、もしかしたらこの先わたしにもできて、変わるんだなあって思ったから、あのときのことを言っておきたかったの。これからは、変わっていくのかな、変わらなくちゃいけないのかな、そうしたらわたしはどうしたらいいのかな、どうしたいのかなっていろいろ考えたから、そしたら、言っておきたくなったの。あのときの本当にさみしかった気持ち、一緒にいられるうちに。わたし、ナオちゃんのこととは生まれたときから好きだけど、ナオちゃんがつても大事だなあってはつきり思ったの、あのときからだったから「僕もみなものこと好きだし大事だよ」

僕も言つとみなもは、

「わかつてるよお、そんなのぉ
とくすくす笑う。」

そりゃそうか。

いまさらだ。

でもそれは、家族の情。

みなもが言っているのは、そうじゃない愛情に大人になれば直面するってことなんだろうな。

でも。

わかるけど、でも、だからって、たとえ織部さんと付き合つようになつたって、みなもの優先順位を下げるなんてこと、僕には考えられない。

だから僕はそのことを言おうとする。

「でもね、あのね、みなも」

「あ。ナオちゃん、もうそろそろ時間」

みなもに言われて時計を見る。

そろそろ夕方の四時になる。

織部さんとの約束は、五時。まだ少し時間がある。

しかしみなもは言う。

「ナオちゃん。ちかちゃんはたぶん、はやめに来ると思う」

「え、はやめって、どれくらい？」

「こういつとき女の子がどれくらいはやく来るのかなど、僕には見当がつかない。」

「ちかちゃんだったら、きつと絶対にナオちゃんを待たせたくないって考えるだろうから、四時半ごろには来ると思っ」

「そんなにはやく？」

「うん。それで、ナオちゃんが五時過ぎてから待ち合わせ場所に着いても、わたしもついさっき来たところなんです、って言うと思っみなもが推理する。」

う。なんだか、みなもらしからぬ、女の子っぽい発言。

でも、ここは信用しておくべきだろうな。というか、経験不足の僕は信用するしかない。

「それじゃ、僕は何時に行けばいいの？」

話を聞くに、僕がさきに着いてしまったら、それはそれで織部さんを恐縮させてしまうのだろう。でも、テレビとかマンガでは、デートのときは（まだデートとは呼べないけど）女の子を待たせてはいけない、って言ってたような気がする。えとえと、どっちが正解？　ひとそれぞれってことなのかな？　僕にはもう、どう行動するのが正解なのか、さっぱりわからなくなる。

混乱する僕にみなもが解答をくれる。

「もう出たほうがいいと思うな。いまから準備して出れば、ちょうど四時半ごろにつけるでしょう？　それで、ちかちゃんが着いたら、少しだけ遅れて出て行くの。あんまり早く行ったらだめだよ。ちかちゃん、次からはもつとはやく来なくちゃって思っちゃうから」

「わかった」

ほぼ思考回路停止状態の僕は、みなもに言われるままに、あわてて二階の自室に飛び込んで、部屋着から外出着に着替える。

階段から降りてくると、みなもが僕のコートを用意して玄関で待っていてくれた。

僕はみなもに言う。

「あのさ、そんなに遅くならないと思うから、ここで待ってなよ。」

それからアルバムの続き見よ」

みなもはにこにこと笑いながらうなづく。

みなもは僕の背中にまわり、コートを着せてくれる。

「ありがとう。それじゃ、行ってくるね」

みなもは、がんばれ、とばかりに胸の前で両こぶしを握ってみせる。

僕もまた、ぐっと両こぶしを握ってみせ、玄関を出た。

門を出て、歩き出しながら玄関をふりかえると、みなもはまだ僕を見送っていて、僕がふりむいたのに気がつく、大きく手をふってくる。そして、くちを四回、開いたり閉じたりする。

なにを言っているのかわからないけど、たぶん、ガ、ン、バ、レ。僕も手をふりかえして、織部さんとの待ち合わせ場所に向かって歩き出す。

と、まるでわがことのようにしあわせそうにほほえみながら手をふっていたみなもの姿に、僕はふとひっかかるものを感じる。

なんだろ、これ？

不思議な既視感を憶え首をかしげる。

でも、とくに思い当たる節はない。

んん？ と考え込み始めかけ……あ、待ち合わせ、とすんでのところで思い出し、あわてて歩き出す。

そして数歩歩くころには、僕の心はもうあとほんのわずかな時間ののちに直面する人生初の大舞台　生まれて初めての告白のことで、いつぱいになっていた。

(14)へ続く

(14)

織部さんと待ち合わせた公園までは歩いて十五分ほどだ。

想いの丘のふもとにある公園なので、先日みなもと小姫ちゃんのお社を探すために想いの丘を訪ねたときとほぼ同じ道行きをたどることになる。

僕の心臓は、古典的な表現だけれども、本当に、早鐘のように鳴っていた。

どきどきどきどきどきどき。

期待と緊張が入り混じって、なんだかわけもわからず逃げ出した。

早くなる鼓動とは裏腹に、足取りは重くなる。

いまからこんなことじゃ、僕がちゃんと返事をして、実際につきあうようになったら、どうなってしまうんだろう。

こんなたまらないほどの緊張感がずっと続くことになんて、耐えられそうもない。

それともいつか、この気持ちがおだやかで心地の良いものへと変化していくのだろうか。そんな日が、来るのだろうか。

いまはまだまったく想像ができないけれど、いつかはみなもとと一緒にいるときのようになり、心おだやかでいられるようになるのだろうか。

みなものことを思い出し、僕の心は少し落ち着く。

って、なんだか情けないな。みなもが心の支えだなんて。みなもはみなもで、僕たちがこれからどうなるのかってこと、ちゃんと考えているみたいなのに。昔は、のんびり屋のみなものことは僕が守ってやらなくちゃって思っていたのに、いつのまにか追い抜かれて

いるみたいだ。

そう思うと、がんばらなきゃ、と勇気が出てきて、僕は待ち合わせ場所への歩みを少しだけはやめる。

かっこつけて、それがさまになるような人間では、僕はない。かっこつけた経験もないし。だから、ありのままの、自分の気持ちを織部さんには伝えればそれでいいんだと思う。そりゃあ、織部さんが好きになってくれた僕、のイメージを裏切りたくないし、僕も幻滅されたくないから、あまりみつともない告白はしたくないけど、でもそういえば織部さんがどうして僕のことを好きになってくれたのかもわかっていないんだよな。だったらやっぱり、僕は僕で、できる限り僕のままで行くしかないわけで。

僕は頭のなかでぶつぶつと考えながら歩いていく。もう余計なことを考えないほうがいいのかなあと思いつつも……そんなの無理！僕、修行僧でも賢者でも拳法の達人でもないし……。

織部さんが僕をどうして好きになってくれたのか、それはわからないけど、僕が織部さんを好きになった理由はわかっている。なんとなく気になる、という気持ちからゆるやかに好きになっていったのだけど、最初に織部さんに気がついたのは　ただのクラスメートのひとりから織部さんという個人に気がついたのは　彼女の人の知れずのこまやかな心遣いを見かけてからだ。何度かそういう場面を目にしているうちに、彼女のおだやかな声や仕草に惹かれ始め、少し引つ込み思案で積極的になれない性格が、ほかの誰かを傷つけないようにと気づつところからきていることや、どうやらあまり得意ではないらしい体育の長距離走でも、最後まであきらめることなく一所懸命に走るがんばり屋なところや、また趣味が僕と同じ読書でかなりの量を読んでいることなどを知って、どんどん気になる存在になっていった。

いつかちらつと彼女の読んでいる本を見かける機会があったときに目にしたタイトルが、僕がいま読んでいる小説と同じものであったときなど、嬉しくなっていまにも話しかけそうになってしまった。

ほら、僕もいま読んでるんだ、これ！　って。……勇気が出なくてできなかったけど。

そういえば、読書好きってことで思い出す女の子がひとりいる。

小林さん。

両親を亡くした僕が一年間だけこの町を離れていた間に知り合った同じ年の女の子。

ちょっとした怪我で病院に一時期入院していたことがあったんだけど、その時にやっぱり入院していて、読書好き同士で仲良くなって、毎日のように一緒に本を読んだり感想を交わしあったりして時間を過ごした。

本当によく本を読んでいる子で、僕が読んでいるような本はたいてい読んでいたので、彼女と過ごす時間はとても楽しかった。

思えば彼女が僕の初恋の人だったのかもしれない。……僕にとってはいろいろと例外な存在のみなもは除いて。

あの頃は、僕、いま以上に勇気なかったよなあ。

あんなに仲良くなって、気が合った子だったのに、連絡先どころか下の名前さえ聞けなかった。……勇気がなくて。ほんと情けない。

そういえば、織部さんってあの子に似ているかもしれない。顔といい雰囲気といい。って誰かと誰かが似ているなんてこと言うの、失礼だけど。

小林さんと最後に会ったのも　僕が病院を退院してそのままこの町に帰ってきたのも、たしかクリスマススイヴの日だったっけ。

小林さんはいまごろどうしているだろう。いつかまた、出会うことがあるんだろうか。あのときもらった栞は、いまでも大切に使っている。

そしてそのクリスマススイヴは、みなもとの再会の日でもあったんだよな。

一年ちよつとぶりの、みなもとの再会。

みなもは、僕の家の玄関前に立ってぼつんとひとり、僕の到着を待っていた。

みなもは身体が寒さで震えるのを一所懸命こらえながら、じつと僕の帰りを待っていた。

僕の乗った車が家の前に止まると、みなもの顔にはぱあつとそれこそ花が開くような笑顔が広がった。そしてにこにこ車から降りてくる僕を見つめる。

家を離れた一年あまりの生活で、僕の荷物はほとんど増えなかった。僕とともに帰宅した荷物はふたつのポストンバックだけで、それをトランクから下ろし終わると、後見人に頼まれて僕をここに送り届けたひとたちは、さっさと車で去って行ってしまった。今日から僕はここでひとり暮らし、ううん、みなもとのふたり暮らしを始める。

車が去り、僕はふたつのポストンバックを両肩にかけて、門を通る。

「ただいま。みなも」

僕がみなもにそう声をかけると、みなもはにこにここと笑んだまま、こくん、とうなづいた。

そういえば、ここに着いてからまだみなもの声を聞いてないな、ってそのときに気がついた。感情表現豊かなみなもだから、たたとかけてきて抱きついてくるくらいのことがあるもおかしくない。でもみなもはそうはしないで、ただにこにここと満面の笑みを浮かべながら、僕が玄関まで歩いてくるのを見ているだけだ。

「どうしたの？ みなも」

にこにこことほほえんでいるのだから心配はないはずなのに、僕はそのときのみなもに妙な違和感を感じた。でもその理由はわからないままに玄関まで歩いて、みなもの前に立つ。

そしてもう一度、

「ただいま」

とそう言った瞬間だった。

笑顔のままのみなもの目じりから、ぼろりと涙がこぼれた。

そしてまた、ぼろり。ぼろり。

涙は見る見る間にあふれてきて、そしてとうとうみなもの笑顔も崩壊する。

「み、みなも、ど、どうし」

「ナオちゃああああああんん。うわああああああんん」

みなもが泣きじやくりながら僕に抱きついてきた。

僕はびっくりした。

だって僕はみなもの泣き顔なんて滅多に見たことがない。ちいさいころから一緒だったから、おねしょをしたのを怒られたときとか風船を空に飛ばしてしまったときとかに、ぐすぐすと泣くのを見たことはあつたけど、こんなふうに大きな声をあげて泣くのを見るのは初めてだった。

「どうしたんだよ、みなも」

「だ、だって、ナオちゃん、ここに、ここにいるんだもん。やっと、帰ってきて……うわあああああんん」

僕が帰ってきたことが嬉しくて嬉しくて、それで泣いてしまったのだ、とやっと僕にもわかった。

にこにこしながら、僕がただいま、って言っても返事ができなかつたのは、いまにも泣きそうになるのを必死に笑顔を作つて堪えていたからなんだとわかった。

そういえば、一年前、僕がこの家を去るときも、みなもは妙に無口で、ただただにこにここと笑つて手をふっていた。なにを言つてもうなづいたり首をふるばかりで、でもにこにこにこにこにこと。あれつて、いまと同じなんだ。きつとみなものやつ、あのときも涙を堪えていたから、しゃべれなかったただけなんだ。僕はそのことにやっと気がついた。

みなもの涙が、僕のシャツに染み込んでくる。あたたかい涙だった。

みなものぬくもりを感じた。

懐かしい、いつもとなりを感じていた体温だった。

僕は両手のポストンバックを地面に落として、みなもを抱きしめ

た。

そして僕は、ああ、唯一の僕の家族がみなもなんだ、と胸が熱くなった。

僕はまだ、家族を無くしたわけじゃなかったんだ。

大切な家族が、まだ残っている。

みなもがいる限り、僕は生きていける。なにがあっても、どんな困難があっても生きていける。生きていく。みなもを守って、みなもと力を合わせて生きていく。生きていける。

大げさだけれども、子供心にそう思ったのを、誓ったのを、憶えている。

ふと。

僕は思い出した。

さつき家を出てくるときに見たみなもの笑顔のことだ。

そして、にこにここと笑うばかりでほとんどしゃべろうとしなかったみなものことだ。

僕はさつき、不思議な既視感を感じた。

妙なひっかかりを覚えた。

それって、これだ。

あの、僕を送り出したときと、迎えたときの笑顔。

涙を堪えるために、必死になって作っていた笑顔。

いやいや、でも、どうして？

どうしてみなもが涙を堪えるの？

僕はどこにも行かないし、みなもだってどこにも行かない。

僕が織部さんと付き合うからだろうか。

うつん、きつとそんなことはない。

みなもは僕と織部さんが付き合うことに反対などしていなかった。嫌がってなどいなかった。

それは長年の付き合いの僕だから、断言できる。

だったらどうして？

どうしてみなもが涙を堪えるの？

わからない。

ぜんぜんわからない。

わからないけど、とてつもなく嫌な予感がした。

嫌な予感を感じたとたんに、僕はまた気がついた。

僕がふりかえったときにみなもが送ってくれた、ガ、ン、バ、レ、
という声のないくちだけのエール。

あれって、いま考えると。

サ、ヨ、ナ、ラ。

そう気がついた途端、すーっと頭から血の気が引いた。そして、
ふらつとよろける身体に鞭打って、僕はすぐに自宅に向かって走り
出した。

みなもがどういふつもりなのか、みなもになにかあったのか、本
当に僕の考えていることが正しいのか、そんなことはわからない。
ううん、知ったことじゃない。

とにかく不安だった。

怖かった。

だから走った。

走って走って、走った。

(15)へ続く

(15)

「みなもっ!」

僕は自宅玄関のドアを蹴破るようにはけると、家のなかに怒鳴った。

返事はない。

「みなもっ!」

さっきまでふたりでアルバムを覗いていた居間の戸を開けるが、ここにもいない。

「みなもっ! みなもっ! どこにいるんだよっ!」

台所、洗面所、そして二階の僕の部屋。

どこにもみなもの姿はない。

なんだよっ! すぐに帰ってくるからここで待っててって言ったのにつ!

僕はすぐさま自宅を飛び出し、となりのみなもの家に走る。

「みなもっ! いるのっ?」

チャイムを鳴らしつつ、ドアノブを掴むと、カギがかかっている。

僕は僕とみなもだけが知っているカギ置き場からカギを引っ張り出すと、ドアの施錠をすぐに外し、玄関に飛び込む。

「みなもっ! いるんだろっ!」

大声を上げ、返事を待つが、みなもの家のなかには静まり返っている。電気はついていなく、人がいる気配もしない。

でも!

でも、僕の家にはいないのなら、みなもはここにいるはずだっ!

僕はそう信じて、信じたくて、みなもの家にあがる。

「みなもっ!」

同じ会社の建売住宅だったので、僕とみなもの家の間取りはほとんど同じだ。僕は居間、台所、洗面所とみなもを探して歩き、最後に二階のみなもの自室に駆け込む。

「みなもっ！」

しかしやっぱりここにもみなもはいなかった。

ただ、この部屋だけは蛍光灯がついていた。

少し前までみなもはここにいたのだろうか。それとも、パーティー前に着替えに帰ったときに、消し忘れたのだろうか。

「みなも……どこ行っただよ」

途方に暮れながらなんとなく部屋を見まわすと、ベッドのうえにさつきまでみなもが着ていた服が脱ぎ散らかしてあった。

と、いうことは、あのあと一度、みなもはこの部屋に戻ってきたんだ。

そして着替えた？

でもそのあとどこに？

ふとそこで、僕は冷静になる。

……あれ？　もしかして僕、こっけいな一人芝居をしている可能性がない？

もしかすると、みなもは僕が出かけている間に、ちょっとした買い物にでも出かけたとか、済ませたい用事ができたとか……。

……それは充分ありえることだよな。

っていうか、そう考えるのがむしろ普通だ。

なにかわからない不安に突き動かされて暴走するなんて、僕って意外とかつとなりやすいタイプなのだろうか……。

「はあっ……」

脱力してしまった。

なにやっってるんだろっ、僕は……。

そしてさらに冷静になって、また僕はあることに気がつく。

「あ。織部さんの約束の時間……」

みなもの部屋の壁時計を見ると、五時五分前。

うわっ！ もう間に合わないよっ！

僕は再びあわてだす。

みなものことで取り乱して走りまわったので、服も髪もくしゃくしゃだし、汗もけっこうかいてしまった。

どうしよう、このまま行ったら失礼じゃないかな、と一瞬考え、でも待たせるほうがずっと失礼なんじゃないだろうか、と思いなおし、みなもの家を飛び出す。

そして再び、今度は公園に向かって走り出そうとして、僕はコートのポケットのなかに違和感を感じる。というか、違和感を感じないことを感じる。

織部さんに買ったプレゼントがなかった。

さっきみなものに見送られて家を出たときにはたしかに持っていたのに。

が、すぐに思い出す。

居間だ。

居間のドアを開けたときに、勢いでなにかが滑り落ちたのをたしか感じた。

すぐに僕はもう一度自宅に戻る。

居間に急いで駆け込んでそこにプレゼントの包みを発見して拾い上げかけ。

そこで見つけた。

一通の書き置きを。

？ナオちゃんへ？

という見慣れたみなものまるっこい字で書かれた書き置きを。

僕はそれを見たとき、身体が固まった。

一瞬のうちに、心が固まった。

嫌な予感がまたじわじわとわきあがってきて、心を染め上げていく。

嫌だ。

嫌だ。

それ、嫌だ。

僕、それ、怖い。

読みたくない。

絶対読みたくない。

誰か消して。

その手紙を消して、無かったことにして。

でも。

その書き置きは消えなかったし。

その書き置きを読まないわけにはいかなかった。

読まないでいられるわけがなかった。

僕は笑っちゃうくらいに震える手で、その書き置きを開く。

やっぱりみなもの字だ。

そうじゃなかったらどんなに嬉しいかと思うのに、やっぱりみなもの字だった。

(16) へ続く

(16)

? 大好きなナオちゃんへ?

みなもの書き置き 手紙はそう始まっていた。

? 大好きなナオちゃんへ?

ナオちゃんはいま、怒っているのかな、それとも驚いているのかな。

…… たぶん、怒っているよね。

うう。ごめんなさい。

でも、ナオちゃんには言えなかったんだよ。

言えば絶対止めるから。ううん、止めてくれるから。

だから言えなかったの。

あのね、わたし、遠くにお引越します。

すっごく遠くだから、きっともうナオちゃんに会えないと思うから、行き先は書かないね。

うう。またナオちゃんが怒っている気がする……。

あのね、ナオちゃん、みなもはいなくなるけど、でもちかちゃんはずごくいいひとだって、わたしが保証するよ。だから、きつとわたしがいなくなっても、ナオちゃんはひとりじゃないよ。きつと支えてくれるよ。

わたしはお引越しするから、織部さんがナオちゃんを好きになつてくれて良かったなって思っているの。

それでね、わたしからナオちゃんにひとつお餞別。

きつとナオちゃんは気がついていないお話。

ナオちゃんがこの町を離れていたときに入院していた病院で、小林さんって子と仲良くしていたって話してくれたことがあったでしょう？ その子はたぶん、ううん、きつとちかちゃんだよ。あのね、今年の初め、わたしたちみんながクラスメートになったとき、ちかちゃんがね、ナオちゃんを見てびっくりしていたの。なんでだろう？ って思っていたのだけど、そのうち、昔ナオちゃんが話していた女の子とイメージがびったりだなんて、みなもちゃんリーダーにびびつときたの。

あ。ナオちゃんうさんくさいっていま思っているでしょお？ でも、きつと当たっていると思うよ。だってわたしたもん。ナオちゃんのことならなんでも知ってるわたしたもん。だから今度訊いてみるといいよ。

最後にひとつ、お願いを聞いてください。

あのね、実はわたしの部屋には猫さんが一匹います。

きつとナオちゃんがかわいいって思ってくれるに違いない猫さんです。てへへ。

その猫さん、わたしはお引越し先に連れて行けないから、ナオちゃんに飼ってもらえないでしょうか。

いえ、ぜひ飼ってください。

わたしの代わりだと思って、飼ってください。

お願いします！

誰かに飼ってもらいたいんじゃないで、ナオちゃんに飼ってほしいの。

みなもの最後のお願いです。

どうぞよろしくお願いします。

えへへ、なんだか紙がいつぱいになっちゃって、もうあんまり書けないね。

あのね、ナオちゃんのことはいつまでもいつまでも、大好きです。絶対に、なにがあっても、わたしにとって一番大事なのはナオちゃんです。

こんなに一方的なお別れでごめんなさい。

でもファミリーレストランのメニュー全部食べられたし、こうして最後の日にもちゃんとナオちゃんとクリスマスパーティーができたし、みなもはすごくしあわせです。

それじゃあ、もう行くね。

ナオちゃん、いままでありがとう。

いつまでも、大好きです。

みなも。

(17)へ続く

(17)

手紙はそこで終わっていた。

最後のほうは、字がふるえていた。

「……ばかだな、みなも。お餞別をあげるのは残される方だよ」

僕は力なく、身体になんてもう二度と力が入らないくらいに脱力して、そうつぶやいた。

僕は打ちのめされていた。

みなもがいなくなつた。

そう、手紙に知らされて、はじめてわかつた。

みなもがどんなに大事なのか、やっとわかつた。

みなもよりも大事なものなんてこの世にはないことが、やっとわかつた。

いまさら！

いまになつて！

僕は本当にバカだ。

大バカものだ。

家族とか恋人とか、そんなもんじゃない。

そんなものを超えたところに、みなもはいる。

僕にとつてのみなもはいる。

バカみたいだ。

まるでよくあるテレビドラマみたいだ。流行歌のラブソングみたいだ。

失ってから始めて大事だったことに気がつくなんて。

僕は居間の床を何度も殴つた。

何度も。

何度も。
殴り続けた。

それから僕は、近所中を走りまわった。
近所といわず、町中を走った。駅まで走り、駅の中までも走りまわった。

みなもを探して。
まだこの町にいるかもしれない、とわずかな希望にすがって。

でもどこにも、みなもはいなかった。
途中、僕はみなもからの最後の手紙さえもどこかに落とした。
それでもみなもはみつからなかった。
どこにもみつからなかった。

僕は自宅に戻る気がせず、みなもの家に帰った。
階段をあがり、みなもの部屋に入る。

きつとみなもが、僕のとりにいるとき以外の時間を一番過ごした場所。

そこにみなものぬくもりを求めて。
僕は走りまわり疲れきった身体を、ベッドを背もたれに床に投げ出す。

と、そのときだった。
「ごそごそ、とベッドの下から音がした。
まさかみなもがそんな場所にいるわけがない。

物音に驚く気持ちも失せていた僕は、ただ情性でベッドの下を覗き込む。

ベッドの下、覗き込む僕から一番遠い壁際で、きらっと二つの…
…どうやら目が反射する。よく見ると、まるっこく縮こまったなにか。そのなにかは覗きこむ僕の目をじーっと見つめている。

えーと……動物？

「……あ。猫か」

そういえば、みなもの手紙に猫がいるって書いてあったっけ、とぼんやりとした頭で思い出す。

ベッドの下でよくは見えないけど、ずいぶん小さい身体をしている。仔猫のようだった。

「おいでー」

猫をかわいがる気力もなかったのだけど、なんとなくベッドの下に手が伸びた。

しかし、差し出された僕の手を避けて、猫はますますベッドの奥に身体を縮こませる。

そして、生意気にも幼い声で、ふーっ、ふーっと威嚇する。

どうやら僕におびえているみたいだった。

なんでだろう。

僕、みなもとよく道端の猫をかまっただけど、嫌われたことっていままでなかったんだけどなあ。

そうぼんやりと考え、でもすぐに思い当たる。

そっか。嫌われて当たり前だ。

だって、僕はさつきからこの家で、この部屋で大騒ぎをしている。みなもの姿を探してどたどたと走りまわり、みなもの名前を怒鳴って。この部屋のドアだって乱暴に開けたし、いまだって、身体を投げ出すようにベッドにもたれた。

これじゃあ、警戒されて当然だ。

「ごめんなー」

僕は猫に心持ち優しく声をかけ、ベッドとは反対側の壁に移動し、座り込む。

猫の姿はベッドの陰になって見えない。

まだおびえているのかもしれないし、こちらの様子をうかがいにこっそりと近づいてきているかもしれない。

でも正直、どうでもよかった。

みなもがない。

みなもがないのなら、ほかのことはもつどつでもよかった。
本当にどうでもいい。

もう動きたくない。

なにも考えたくない。

空気さえ吸いたくない。

吸いたくないけど、肺は勝手に動くし、勝手に動くなら止める気もない。

本当に、どうでもいい。

どうでもいい。

(18) へ続く

(18)

どれくらい経ったのだろう。

そのあいだ、僕はなにをしていたのだろう。気がつくと、投げ出した足元に仔猫がいた。

あわい茶色と白のふわふわした綺麗な猫だった。

仔猫はふんふんと、僕の匂いをかいでいる。

気づいた僕がぴくっと身体を動かすと、仔猫は敏感に飛び退る。

僕は苦笑する。

「大丈夫。なにもしないよ」

何もする気がないんだから。

何かをする気力なんかもうないんだから。

僕がまたぼーっとしていると、仔猫は用心深くまた近寄ってきて、ふんふんと僕の匂いを嗅ぐ。そしてそのうち、僕の手の届く場所まで近づいてくる。

すばやく手を伸ばせば捕まえられるなと思った。

でも思っただけで、行動する気にはなれなかった。

僕は仔猫がしたいままにまかせた。

そのうち仔猫は、僕の身体に登り始めた。あまり器用な猫ではないのか、それともただ幼いだけなのか、何度か落ちかけながら僕の身体にのぼり、そして、僕のおなかのあたりまでくると、みゃあ、と僕の顔を見上げて一声鳴いて、まるくなった。

僕が大騒ぎをしたせいか、はじめはずいぶんと警戒していたけれども、どうやら人懐っこい性格の猫のようだった。まるくなった猫は僕のおなかの上でごろごろと喉を鳴らす。

腕をふにゃーっとのばし、伸びます。

なんだかこいつ、みなもみたいなやつだな。

そう心のなかで思った途端、はっとした。

まさか。

まさか、だよな？

僕は大変なことを忘れていたことに気がついて、身体の血が逆流したような気分を味わう。僕は仔猫をおどかさないように、そつと手をのばして触れてみる。

やわらかい、見た目どおりのふわふわの毛並み。

身体に触れた僕をきょとんと見上げる目には、無邪気な不思議そうな色しかない。

「みなも？」

呼んでみる。

が、僕の声に耳がくるつと反応するだけだ。

……やっぱり普通の猫だ。

そりゃそうだよな。いくら不思議な現象に見舞われていたからといって、ここまで本当に人間が猫になっちゃうなんて、あるわけないよな。

僕は笑ってしまう。

笑いながら、しかしてのひらに取った猫の手を見て、僕は動きを止めた。

毛並みの柄に、見覚えがあった。

手の先が靴下みたいに白くて、そしてあわい茶色の毛を挟んで、また腕輪みたいに白い柄がある。

猫化したみなもの手にあった柄に、よく似ていた。

いや。

まったく同じ柄だった。

「……お前、やっぱりみなもなんだな」

僕は仔猫に話しかける。

でも仔猫はただ僕の目を見つめ返して、くりつと耳で反応するだけだ。

ここにいるのは、ただの猫だ。

もう、ただの猫だ。

でも、これはみなもだ。

僕は確信した。

手の柄以外になんの確証もないけど、僕は確信した。

「みなも……どうして」

猫化は抑えられてたじゃないか。

猫の手も、猫耳も、人間の姿にもどせていたじゃないか。

それなのに、どうしてこんな急に。

でもそれである突然すぎる引越しの手紙も、ベッドのうえで脱ぎ散らかされている服にも説明がつく。

みなもは近いうちに自分が完全に猫になることが、わかっていたんだ。

だから猫になる自分を僕に託して、自分は引越しを装って僕の前から消えた。消えようとした。

僕はみなもの服の陰に、あるものを見つけた。

あの、僕と子供のころに交換したおもちゃの指輪の付いたネックレスだ。みなもがこの頃ずっと身につけていた、あのネックレス。

もし、もし本当にみなもが引越したのなら、このネックレスを置いていくわけがない。

だいたいおかしいよ。引越すなのに、この部屋、みなもが暮らしていたときのままじゃないか。荷物なんて、なにも運び出していないじゃないか。

ばかだな、みなも。アリバイ工作が全然できてないよ。

うつん。さすがにみなもそこまでばかじゃないか。間に合わなかった、のかな。

きつとこの部屋まで戻ってきたところで時間が切れて、猫に。

そういえば小姫ちゃんが言っていた。

？一度願った願いは、叶うまで止まらない？

みなもの猫化は、きつと止まっていなかったんだ。

僕の前ではなんとかなったふりをしていただけ、きつと猫耳のあとも猫化は進行していたんだ。でもなんとかそれを隠し通して、パ―ティまで、僕を見送るまで、猫になつてしまふのを我慢した。

どうしてそれを僕に言ってくれなかったのだろう。

僕がそれを拒むから？

猫になりたいと願ったのに、止めようとしたから？

みなもはそんなに猫になりたかったの？

どうして？

僕と一緒に、ずっと一緒にいることに不満があったの？

ねえ、どうしてさ、みなも！

僕は仔猫を抱きしめる。

仔猫は驚いて逃げようともがいたけど、少し手の力を緩めると、僕の頬に顔を寄せ、ごろごろとまたのどを鳴らし始めた。

みなも、無理だよ僕には。

僕には無理だよ、みなもがいない生活なんて。

みなもがいない世界なんて。

だったら僕のやることは、もうひとつしかなかった。

だから、願った。

(19)へ続く

(19)

一軒の家のドアから、二匹の仔猫が顔を覗かせる。

一匹は薄茶色に白のふわふわした猫。

もう一匹はもう少し濃い茶色でお腹の部分が真白な猫。

仔猫たちは、おそろおそろドアの外へと歩み出す。

濃い茶色の仔猫が最初に。

濃い茶色の仔猫がふりかえって、みー、と鳴く。

すると薄茶色の仔猫も暗い外へと足を踏み出す。

二匹の仔猫は用心深くあたりを警戒しながら歩くが、差し迫る危険はないと判断したのか、やがてその家の門を出て、冷たいアスファルトへと歩き出す。

仔猫たちはアスファルトに触れた瞬間、ぶるぶると身体をふるわせる。

しかし、二匹は後戻りをしなかった。

家のなかにいたほうがあたたかいはずなのに、ふりむきもしなかった。

ただ二匹は、おたがいの体温を確かめるように身体を寄せ合っただけだった。

ほかになにもいらないとばかりに。

そして仔猫たちは、みゃー、みゃー、と一声だけ鳴き交わすと、なんの迷いもなく、いや、きつとただ無邪気なままに、夜の闇へと走り去っていった。

(20)へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3302z/>

こいねこ

2011年12月29日12時51分発行